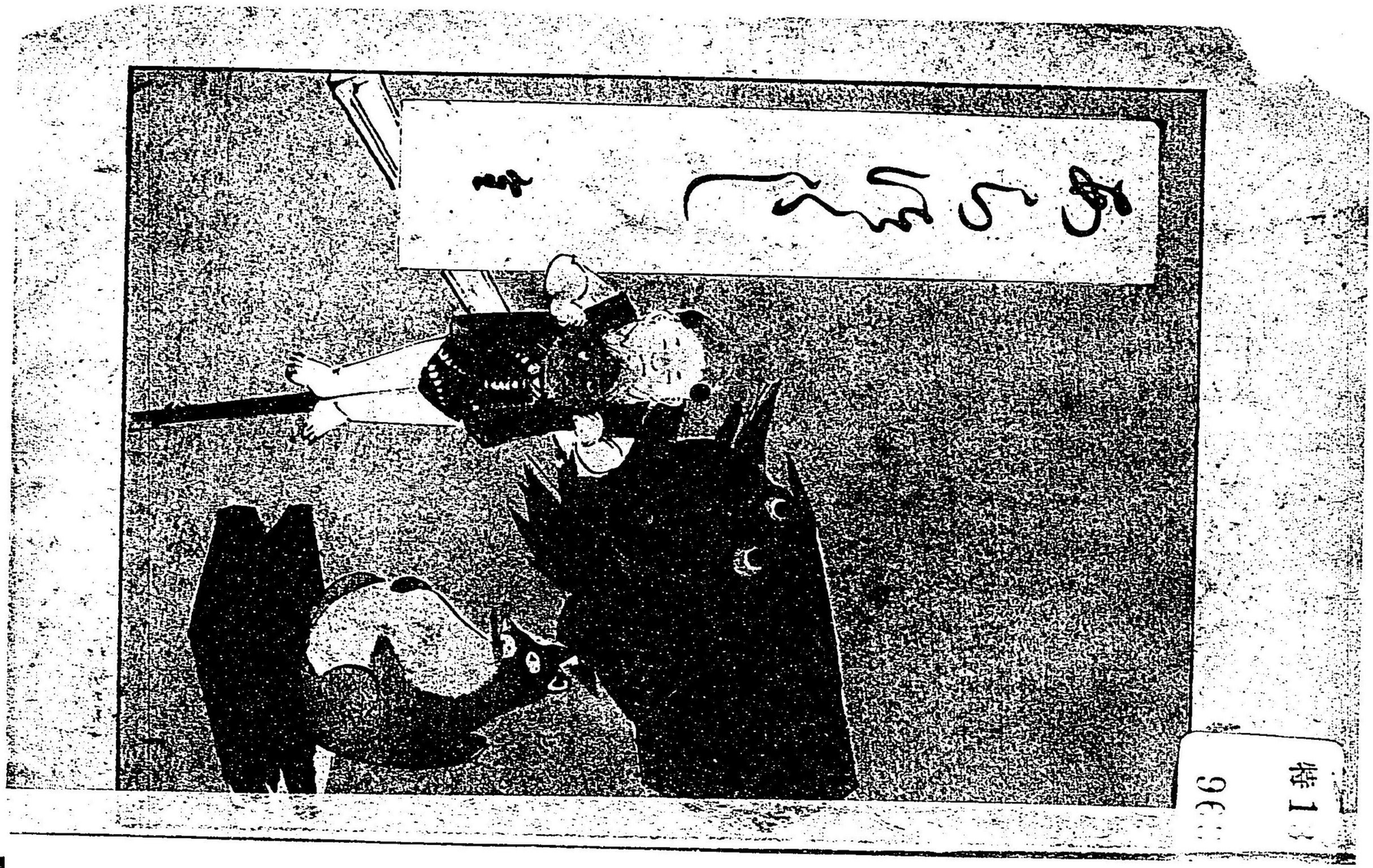


96
特1

あらつくし目錄

なれの果（上）……
仝（下）……
兩面鏡　第一回……
仝　第二回……十三
仝　第三回……十九
仝　第四回……二十四
仝　第五回……三十
仝　第六回……三十九
仝　第七回……四十八
仝　第八回……五十七
圍ひもの（上）……六十五
仝（下）……七十三
この話しさくやの夢（上）……七十八
……八十六

明治三十七年　校

特13
963

仝　（下）……百二
だまされ狸……百十二

あらつくし目錄終

あらつくし

なれの果　（上）

鹿だつて大概此樣はきずなつけぬ。

れい、新入りの人、氣をつけねえな、先刻もそう云つたぢやねえか、どんな馬のして居るのを見りや、了解るだらうぢやねえか、えゝおい、放だねえ、叙方に、ねえ、何れも、誰だちや仕樣がねえせ、そうぢやねえてえのに、ちよッ、分らねえ陳列てあるのを見ねえな、れ前のやうな分らねえ奴アありやしねえ、何れも、誰だつてそうだねえ、婆婆からの煉瓦職人ぢやねえや、人をつけ、馴れた具似しやがるな。

曾て人を巻き事て

おい、新入の人お前分らなきやさう云つて聞がいいや、此處ア婆婆とア違つて來とりやしないやア、ろりやお前なんざア、どんなことして來たか知らねえが、具逆親孝行で來とりやすめえ……して見りや、ちッたア悲い目をするなア當り前だねえ、おい、是を彼方へ擔いでゝくんねえ、ろりや堂せ婆婆に居て女を擔ぐやうな譯にや行ねねや、おい、金太ちつと休みねえな、新入の人

にやつて貰へ。

れい、何や新入の人お前ちよいとこれえ、やつてくんねね、堂せ懲役だアねえ、ちッたア骨ア折れらア……當り前よ、これが出來ねえ位ならア婆婆で惡い事をしねえが宜や……から意氣地のねえ奴だねえ、ざまアねえやア、夫で能入並に惡いとが出來たもんだ。『如何に此世の地獄とは云へ、斯くまで人の鬼々しきことぞ、夫なら夫と云へば得に、云はで此身を苦むるも思へば己の心から、今更誰を怨むにも及ばぬ事と、あの時にふッつり思ひ切ッたなら……人の意見を聞たなら……かう云樣にもならないもの……親兄弟がこのさまを……夫にしても小さんめが……今頃ア何と思つてるかしらア、天窓と云やア栗々で……赤い着物で煉瓦擔ぎか……これも今更仕方がないが、少し堂かすりや今の樣にあんな奴らに、威かされるのが癪にさはらア、と云て是が監獄の僻、曲つたものゝ寄合處だと思やヤ、尤も無理アねえが……。と自らとひ自ら答へつゝ、叩き上げし煉瓦を、近邊に乾して居る一人の少年、左樣さ年は二十四五にもなりぬべし、其容貌ふりは元より囚徒の事にしあれば、れ定まりの柿色もの、如何なる人の成れの果か、定かに夫と

知由あらねど、其物云ひ越より考ふれば、商人の家の番頭でゝも有しならんか、此島へ送られてより未だ日數もたゝぬと見ね、あたりのものに追廻され、新入新入りとてき遣はるゝ驢梅、夫れでも當人は從順腹は知らぬが表面では、只へいへいと立はたらく樣子、あゝ此樣な精神で、今まで婆婆で勤めて居たら、どんなに金錢が溜るだらうか、嘸ぞ親たちも安心だろとは、又た殊勝の樣なれど、實地かう云氣になつて、改心するは少きと見え、寄とさわるとよからぬ話し。

龜や達摩の國ア一向來ねえぢやねえか。

さうよねえ今に來るだらうよ。

あの下谷の竹は。

ありやれ前どうに、市が谷へ喰ひ込んだとよ。

道理で見ねえと思た、一件ものア（連累）あるのか。

むゝおかめの金だとよ。

ありやお前へ茂三（掏摸）ぢやねねか。

さうよ。

竹に就ちやお話しさ、恰度去年の春であつたつけよ、眼鏡から鐵道馬車で京橋まで行たと思ひなせえ、處がお前から、時化で仕方がねえだらうぢやねえか。

むゝ。

余り詰らねえから京橋で下りてよ、煉瓦を少し稼いで見たがア、此奴も同じく面白くねえ處から、氣がぐれてよ、品川へでも行て遊んで來よう……と思つて新橋まで來たと思ひなせえ。

又た思ひなせえか。むゝ。

處がお前ろら千歳の隣りに、繪草紙屋が有だらう、彼處でお前かゝつた鴨さ……

……左樣さねえ年頃二十四五でもあつたか、糸織の三枚重ねてえので、りうとした容體よ、ほろ酔機嫌の喰へ揚子かなんかで、芳年の繪に見惚れて居たのは天の引合せさ、處がお前其處で奴さん、やまと新聞一枚と、金港堂から出る都の花とか云ふ雜誌を買つて、これでつりをくれろと革提から。五圓紙幣一枚出たのをちよいと拜んだろ……さうさねえ凡そまアてれん計りも厚身があつたろよ、處がお前繪草紙屋めが、も少しちひさなので堂かと返すを、奴さんてれより少さいのはね

えてたア口裏お前れつぢやねえか、ろれからられ前堂するかと思つてつけ行たら、停車場へ行て濱行の切符を買たから、此方も同く濱迄の切符を買てよ、奴さんの後へついて一つ室へ這入たのさ、處がお前先方ア其意な事たア知ねえや、品川あたりから宜い心持に漕き初めたさ、此處でと一番手ぐすねを引て見たが……魂へ惡い事するもなアお互へに氣が引らア、側に居たア道樂ア（客の事）づきアがつた樣でよ始末に行ねえあゝ、我ながら意氣地がねえと思つたが、……する內に濱へ着たのさ、此處でやらなきやお前仕樣がねえと思つたから、汽車から下り際に其の奴さんの帶をちよと解をきッかけに、『もし旦那帶が解ました』と、かう一番ふりかけた處がよ、奴さん何氣なく『さうですか有難』と、手に持て居た革提をうつかり下に置て帶をゞて居る間に、革提を引浚への直飛下り、まアづ安心と、伊勢崎町迄づらかつて來て、しやも屋へ押上りいきなり中を改めた處が、お前まア娑婆勘定でざッと幾ら有たと思ひなさる。

さうさねえ已れにや分らねえや。

さうだらう已れだつて初めや分らなかつたが、段々數か改めて見りや、お前耳

を揃へて五百兩よ。

うまくやりやがつたな。

處が餘り甘くねえのよ、此奴有難とほく〳〵杯一やつて居ると、お前向ふの隅ッ方の方に、安坐かいて一人やつて居たのが、お前今の竹だらうぢやねか、『いよ竹か』『兄』てえのが初りで夫からお前一處になつて呉金町の……夫も止せば宜いのに、馴染の樓へ上つたのが運の盡よ、其夜直に手が廻つて此始末さ、夫ッ切り竹にや逢はねえが、其時ア奴ア何でもつらかつた樣だつた。

そいつア宜くなかつたな。

處がね前其革提の中によ、女郎の寫眞と起證が一枚這入てたが……其起證に、さう〳〵中村德、小林清三郎樣と書て有たのが、今思ひ出しや何だか聞た樣な名だが、廻お前知らねえか、

と何氣なく話の市の榮えるを、耳傾けて聞いて居たのは伴の新入、溜りかねてや進み出で、

其小林てへのは私しが知つて居ますが、もしやかふ云ふ人體の男ではございま

せんか。

さうさ夫をお前が堂して知てる。

其小林なら、もと私しの友達でしたが、もうこの世には居りません……

死でもしたのか。

左樣です。夫について私も……まア妙な云々から、此樣な身の上になりました……其一通りお聞きなすつて下さいまし。

芝居なら此處アあつらへの相方になる處だが、段段面白くなつて來た、堂云ふ譯だえ夫れが。

おい待ねえ看守が廻つて來たから、暫らく煉瓦を並べた〳〵。

（下）

いッちまやアがッた、彼奴ア呉個に鼻摘だ、ちッとでも話して居ると直ぐ〳〵云やアがる、おいなにイ新人の人、もう宜から此方へ來ねえ、其小林てえのは堂したてえのだ。

夫がさ、かう云ふ譯なのです、一體小林てえ男は銀坐邊の或會社の社員でした

が、私も店の用向で其會社へ折々出向く事がありました……する中にちよい〳〵顔を合すもんですから、いつか其小林てえのと心安くなつて、互に『まア一杯やりやせう』、『れ伴しやせう』てへのが初りで、近所のお茶屋や何かへ行て遊んだ事がありました……が妙なもので、遊び位又他人と心安くなるものアありません……すると先生或る日吉原の話をして、かう云ふ譯だから一度突合つて呉れないかと、紙入から其起證でせうよ……起證を出して惚氣出したぢや有ませんか。

むゝ。

夫もいゝさ、他の女なら兎も角も……私が現在買つて居る娼妓だらうぢや有ませんか……先生夫を知つて居るのか、又た知らねえで云ふのか分らないか……ちッたア癪に障るぢや有ませんが……勿論先が堅氣と違つて、あゝ云ふ商買ですから、金さへ出しやどんな人にも身を任すなアそりや仕方がないとした處がさ……が、眞迎起證まで他の人に……

おい、惚氣ちや困るせ、お前何かえ其娼妓と深い約束でもしたのかえ。

と云ふ次第では有ませんが、少し夫れには譯がありまして……。

なアる、末は夫婦てた樣な譯合で、夫から堂しやした。

其場は體よく斷つて別れましたが、さて氣になるのは今の起證の一件です、如何に輕薄な家業だつて、さう〳〵人をはめられるものぢやねえと思たから、直と其足で人力車にのり小三の處へ……

中村德てへのが其小三とか云ふ娼妓の。

はい本名です、其小三の處へ行た處が、お前さんひけ過の事ですから、坐敷が塞がつて居ましたので、名代へ入れられました……する中に小三がばた〳〵やつて來ました、『今來たの遲いぢや有ませんか』と笑ひながら傍へ居つたが、此方は堂してさう云ふ譯なんですから、口もろく〳〵きゝません。

むゝ面白いや其處でお前が手刃か何かを振廻して此阿魔能くも〳〵とか何とかお定りの恨文句をならべて、殺しになつたと云ふ一件か。

處かさうぢやないんです、まア聞て下さい、すると小三めが、『おや堂かしたの顏色を替てさ……お花どんあの』……と何か傍に居た新造に叫やくと、新造が點頭き立て行と間もなく、二階のれ婆さんを初め店の若いものがでた〳〵やつて來

て、只今は有難う〳〵とお辭儀をするぢや有ませんか、一體譯が分らない、すると新造めが『何ですねえ島田さん眞面目な顏をしてさ、堂かしたんだよ、さア家へお歸りになつたら、お召をお着替へなさい』何てへとう〳〵寢衣を着せやアがつた。

む丶、畜生め、もう其處いらで止て貰ひてえ位だ。

まアさ、處がお前さん、其夜はさう云つた樣な譯さ祝儀はと聞と『野暮なことを云ひてなし宜んですよ』とまア先で出した樣な次第……、ろうなると又た異なるので、先で少々無理があつても無言つて居る樣な始末で……

おい〳〵賴むせ、此處ア何處だと思つてるんだ……女の無へ島だぜ。

え丶、つひ茫然、然しまア其處ア何となく大目に負けて貰つて……と云ふ樣な譯で其の時起證の事も云ひ出しては見たが、何だか袴立ちません、先の云ふも一理ありで、『お前はんも了解らないぢや有ませんかあんな人に』……の一句で止めをさゝれて見れば、え丶、言出さなかつたらと思ふのは愚痴です、夫からてへものア猶一層熱度が增して來て、せつせと通つて居ました……が小林がこれを聞て、同じく劣ぬ氣になり、島田が十日遊びや已も十日遊んだやと、互に詰らぬ競爭を

初めたのが……今思へば堂云ふ氣でしたらう、その馬鹿氣さは有ません……全く魔でもさして居たんでせう……する中に小林が段々會社の金を遣ひ込み、帳面尻が合はない處から、毒喰はゞ皿と會社の有金五百圓を引浚つて高飛したのが、恰度去年の春、惡錢は身に着ずの譬への通り、新橋から横濱へ行く途中で、直ぐ其金を掬摸取られ、仕方がない處から横濱で知己の家に隱れて居たが、其中に堂氣が變つたかして、或日の事其家で首を括つて死だと云ふ噂さ、今で思へば其時の何したのは、お前さんでしたか……

さうよ、因緣を聞て見りや怖へものだねえ、已だつて其金でかう云ふ始末さ、夫からお前ア堂したえ。

さア、小林のさう云ふ惡い噂さを聞たもんですから、自分も改心して堅氣になれば宜つたものを、矢張でれ〳〵その娼妓につ通て居たのが身の過り、いつか自分も大穴を店の帳面に開たのでお拂箱……が、其處ア種々詫をしてやう〳〵勘辨してもらつた……が、さて出てからは仕方なく、一時人力車を引て居りましたが、夫もなれぬ業とて思ふ樣働けぬ處から、一日引いては二日休みぶら〳〵遊んで居

る中に、……つひ宜からぬ出來心でかう云ふ始末になりましたも女に迷ひ世の人に不義理をしましたむくいでせう。と眞實面に現れて、身のなる果を我となく、語るも聞も世にありて、惡事をなせし成れの果。遊蕩に恥りし成れの果。

＊　＊　＊　＊　＊

さて又た娼妓小三の事は、其後間もなく或る客筋に落籍されしと風のたより、されど元より浮薄なる、家業になれし女ゆゑいつまで其處に居たゝまるべき旦那をせびつて芝居見物、物見遊山に寄席這入り、夜は十二時をお引と思ひ、朝は午後の一時起きを早いと自慢する樣では、古人の金言宜なるかな、矢張野に置け蓮華草、旦那はほと〳〵愛想がつき、自分もぼつ〳〵いや氣になる、出來るも止すも速成主義の有難さ、直樣其處を飛出して兼て馴染の鈍帳役者へ、世話女房に住込だが、金がなくなりやお搏へなし、出て行けがしの待遇に、今はつく〳〵困じ果泣て居るのも世の中の浮氣女の成れの果。

第一回　寫出す兩替店の裏表

處はたしか日本橋通りと聞きぬ。間口は餘り廣からねど、表の體裁店の臺梅、左りとて苦しき懷とは見えず。主人はいつも不在……とは意味あり氣な不在……奥の一間、――帷幄の裡に、進退の策をや運らし居るなるべし。店には手代が忠實〻〻しく、出入の客の應接に、ならぶる世辭こそ實に伏兵なれ。

「いよ、いらつしやいまし、先達ては、いえ手前こそ却つて失禮を致しました。……さアどうぞ、左樣でございます、もう上野は宜しうございませう、どうぞお敷きなすつて、いえ同じことです、なにや、あのうお茶を、……はい有難うございます、お蔭樣でまあどうやらかうやら」……

「そりや結構です。何です東株は近頃如何ですか。……なアる左樣ですか正金株も。……相變らずで、……はゝア只今では、……むゝ鐵道株が、……左樣でせうねえ。然し其中には多少高下も」、……

「はい自然でございませうと思ひます……が、何しろ追々月末にも差迫つたことですから、御案内の通り、何方も手扣への姿で、活潑な取引もございませんで、

面白くありませんが……、どうぞ又御見込がございましたら、……で用を仰付られて、はい有難うございます。どういたしまして精々勉強致しまして、左様でございます。……いえ、まア宜しいぢやございませんか。……左様ですか、誠にどうもお匆々様で何あのお下駄を、……へいらつしやい」。

「少し計えはア兩替して貰へてえでがんすが」……

「かしてまりました。何程」……

「ろの何でがす、かふ云お譯でがんす。やれまア、ご免なせえましよ、どうもはア毎年この木芽時になりやすと、えらくはア腰が痛みやんすので」。

「そりやお困りでせう、どうぞお敷きなさい」。

「はいかうまア腰かけてると、さうでも有りましねえが、道歩行とどうもはア溜りやしねえで、人力に乘ていつもはア來るんでがんす」。

「へゝ成程、れ兩替はどう云ふものでし」。

「ひやア、夫がさあお前アさん、恥を云はねえぢや道理が分んねえでがす。私これでも六十五でがんすが。私にはア娘が一人がんして、今年はア十八になりやす。夫がお前アさんあらうことか有めえことか、村の戸長殿のはア悴と喰付やして」。

「成る程」。

「夫れえ私知らねえで居たでがんす。處がれ前アさん諦れたもんぢやがんせんか、阿魔ッちよ腹がひやア大くなりやして」。

「へえ〳〵、おい兼吉お茶を入替へて……成る程」。

「村中もうはア知んねえもなア無へでがんす。其處で戸長殿がはア云はつしやるにやア、出來た事ならア仕様がねえだからア、してお前處の娘をいつそ己がのに呉んめえか』、とかうまア云ふので、婆婆アとも種々私ぶちあけて話したでがんす。處がお前ア様、婆々アが云ふにや、爺さん其様な有難えこたアねえだ。戸長殿から嫁に呉れッて。ろんなら直にもやりますべえ、お前がやらにや私やるとかう婆々が云ふので、私もはアそんならアて、あれを嫁にやりますべえと相談のうきめやした」。

「へえ〳〵」。

「處がお前アさん娘が云ふにや、戸長殿の處へ行くにや着物こせへねへぢや、いやだと駄々こねて、仕様がねえでがんす」。

「成る程」

「夫でまアお前アさん錢てえなア、此間村の税を拂ふてありやしねえので、據ころなくこれはア兩替のうして着物買ふべえと思ひやすのでがんす」。

「成る程そりや結搆でございます。いえ何れも同じ事で、一生に一度の御婚禮でございますれば、ご無理はございません、處で……左様なら古金で百圓儲に只今御引替を」……

とあと振向いて小僧に目くばせ。

「あの土藏へ行て紙幣を百五十圓もつてお出で」。

「へえ」。

起て奥へ這入る、小僧の後影見送つて先しめたと云ふ顔。件の古金を受取つた儘、背後にある戸棚の抽出へ入るが表。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

内幕は興賓の異處とでも洒落べきか、件の抽出……實に曲者……玉の巵底なき抽出。

今入れし古金は、將に此店の奥の一間に現れ出で、主人の指揮に小僧の使者、直ちに本城へ賍附けて兩替し居るぞとは。——

知らぬが表。否佛。客人は嫁入話に餘念なく。

「はア清と申しやんす。はいまア村では夫でも評判もので、ひやア有難いことにやア」。

「左樣でせうねえ、まアお前さんも早く初孫のれ顔を見て」……

「ひやア夫が何より樂みでがんす……處で今の錢は」。

「只今直少々お待ちなすつて」……

「さうでがんすか。夫でまアお前アさん、娘の着物を少し計え買ひやすのでございやすが、婆々が云ふにや越後屋、はア白木屋へ行つて新らしくこせへると、大く掛るだからして寧ろ古着を買たらてえやすので、はアこれからお前アさん仲通りへ行きやすのでがんす」。

「成る程其方が左様ですねえれ徳用でございませう。もし仲通りへお出になつたら、中程で小島屋てえ店でどうぞお求めなすつて、……へゐお分りになりませんん様でございますれば、ちよと小僧をご案内致させませう」。

「左様でがんすか。はア有難うがんす」。

手代の機嫌、四方山の雑談に敵を喰止め居る中、小僧は奥より出來り。

「百五十圓でございます」。

と渡すを受取つて。

「むゝ宜し、左様なら手數料引去まして百四拾八圓差上ます。どうぞお改めなすつて、いえどうもお待せ申しました」。

「やれ〳〵慌にでございます。そんなら小僧どんに今の小島屋てえのを」……

「宜しうございます。兼吉あの旦那を仲通りのそら小島屋まで御案内申しな。さうさそらいつかの古着屋さ。どうか旦那また御用を、……毎度ありがたうございます。」

跡で手代は莞爾もの。

「田舎の人は成る程正直だ」。

第二回　寫し出す古着屋の裏表

日本橋仲通りと云へば、人も知つたる古着屋の軒を並べし繁昌の場所。實に當時の流行者、或時は粋と賞せられ、或時は意氣と呼ばれし召物も、一旦主人の寵衰へ、此地へ流涙の身となりては、昔の面影何處へやら。とは云へ小紋の二枚重ね、古代更紗の下着を見ては、元の主さへ慕はしく、結城紬に古渡りの澁味は、何れ八十八商の手にやかゝりしものなるべし、黒縮の一つ紋、一樂八反の書生羽織は、袖の移香今も猶寄らば匂はん奥ゆかしさ、糸織南部のおとなし造り、斯く解張の刑に處せられては、憐れ無情を恨むならん。往來の人の品定め、高いも低いも姫御前の肌に觸にし絞織も、二子木綿と一列に、衣紋竹にぶらんこ往生、吁嗟かうなつては是非もなし。最前より店先に立つて、けろ〳〵ならべて有る古着を餘念なくひねくつて居る田舎の客を、商賣上手の主人は呼び入れて。

「まアどうぞ此方へ、いえ此他にも種々御恰好なれ品がございます、成る程お嫁入の御支度では」……

と背後を向き大きな聲。
「あの松や、お客さんを奥へお通し申すから、お火をれ入れ。あゝ其離れで……宜かえ」。
奥の方で、かしこまりましたと答へるは女の聲、蓋し妻君か下女なるべし。
「貴君店頭では餘りでた草致しますから、どうぞまア奥へれ通り下さいまし。いえ其方が却てお品をご覽になるのにお宜しうございます。はいどうぞさアずつと」。
「そんならはア上りますべえか、あゝ年とると上り下りが苦患でなんねえ。夫に腰病んで居やすからはア」。
「左樣でございますか、れ大事になさいましいえ、手前もどうか致しますと、時々痼の氣で困ります。さアどうぞ、夫へ」。
「やれはア構アねえで置つせえ。ひやア結構なお菓子でがすな」。
「いえどう致しまして、ちつともお構ひ申しませんで誠にお氣の毒樣で、……さう致しますとれ嬢樣は當年れ幾歳位で、……はア左樣でございますか。お十八

でいらつしやいますか。ろれは恰度お年頃で、……左樣でございますとも餘り長くお家にいらつしつては、お爲になりません、はいいえ夫が宜しうございます。なにや、あのう店へ行てちよいと藤七を呼で來な」。
主人の召しに番頭は罷り出で。
「えゝご用でございますか」。
「むゝこの旦那の御注文だがねえ、お前そらいつうかのはどうだらう。恰度お年頃も宜しお嫁入と云ふんだから」……
「左樣でございますねえ、屹度お宜しうございませう」。
「ありや今店にあるか知ら、何處見せにやつた樣だつたつけねえ」。
「左樣でした。いゑ直取寄ますから」……
「夫ぢや竹松を取りにやつて、……うしてお前何か店に行つてちよいと出て居るのを、見つくろつてご覽にお入れ申しな」。
「かしこまりました」。
「早くねえ」。

客人へ向ひ。

「旦那かう云ふ譯なんです、前月末の事でしたが、去る御花主樣から、恰度此度の樣に、お嬢さんのお嫁入のお支度てえので、すつかりお召物をご新規にお誂へになりましたので、手前の方でも勉強致しまして早速出來上りました處が、……どう云ふご都合でしたか、先で其お嫁入が破談になりましたので、お召が入らなくなつたので、手前の方へも俄に破談、實は困つて居りまするのでございます。……が、何しろさう云ふ品物ですから物は極惱で、夫に一度もまだ手を通さないんですから、古着と云つても新らしいのと變りません。どうか此分をそつくりお求め下すつたら、手前の方も大きに又都合が宜しうございますので、はいどうかお願ひ申したいもので、……

「ろりやはア宜かんべえと思ひやんすが、どうか早くろれゝ見度ものでがんすな」。

どうぞさう願ひましたら、はい只今直ぐ參りますから、どうぞ御緩りと何もございませんが、恰度時分でもございますから御膳を、……なにほんの出來合でございますが、どうぞ召上つて下さいまし手前もちよいと御免を蒙りまして」。

と主人は立つて店へ來り、莞爾打笑むが表

＊　＊　＊　＊　＊　＊

裏から見せば主人の腹は。

「あゝ云つてまア酒でも出して置きやア、田舍者だから先づ充分しめたもの、商買も此位でなくつちや儲からねえ。夫にしても何處かに恰度恰好なものがあればいゝが、……いゝやア無つた時にや、妻のをろつくり振向けてやる分の事。ろうした後で入用のもの丈買求めりや宜……全體店が淋しけりや自分の着てるものでも、出してぶら下げて置くのが我々の商買柄。妻のものなんざア無論不用だから、……だがいつかの樣に夜着をすつかり質附けたのには困つたね。恐ろしいもんだ、かうなると人間も慾と二つで我慢もするのさ」。

奥では斯と白髮の客、主人の歎待に現を抜し。

「ひやアいらく御馳走になりやんして、はア有難うがんす。あて少しやるとどうもたまらねえで、ねむくなりやすのが私癖でがんす」。

「夫が結搆なのです。どうか致しますと御酒を召上ると氣の荒くお成んなさるお

方がございますが、おねむくなるのは宜しいんですよ。あのうお布團とれ枕を差上げますから、どうぞお休みなさいまし。はい參りましたら直とれ起し申しますから、れ心置なく御綏りと」。

「どうも種々濟みましねえが、そんならはア御免なせえまし」。

「さアどうぞお休みなさつて」。

轉ぶが否や高いびき。

店では主人は北叟ゑみ。

「寢ちまつたか、夫で少たア氣が落着いた。中村屋と林屋と木村屋とで聞合せたら、大抵物が揃ふだろ、旨く行やが片手はたしかだ」。

第三回　寫し出す娘心の裏表

「おつ母アさん、私やあゝ云つてお父さんには云つて置たけれど、お嫁に行くなア、」……

「今其樣なこと云つたつて仕樣がないぢやないかねえ。夫に先方が戸長さんだから」。

戸長さん、此一語は如何なる權威を保つか、娘の緣談にまでも戸長、吁嗟田舍の情體は思ひやらるゝなり。母親は熱心に戸長の有難味を述べ立、どうく娘を組伏せたと見え。

「さうお仕なねえ。もうれ父さんも歸つて來るから」。

「だつてもう」。

「夫に髮結さんもゝう來るだらうから、あゝ夫で宜だらうよ櫛は、……さう、だけれど寧そあちらのにお仕なねえ。見つともないから」。

娘は何だか進まぬ容子、……なれども母親へ氣兼して。

「夫ぢやれッ母アさんさうしませう」。

「あゝ夫が宜い。而してねえ、着物はどうせお父さんが買つて來た許りでは氣に入るまいからして「お前の氣に入つたのを、……あゝ宜ことがある、私の着物の中でお前の好きなのを、……搆はないとも昔しのでも、……下駄は……恰れたねえ、お父さんにさう云ふのであつたつけ。宜やねえそりや明日またア誰かに行つて貰ふから、早くまアれ前顏でもお洗ひなねえ。見つともない眼のふち

を赤くしてさ」。
「お母アさんお父さんは何時頃お歸りだらう」。
「もう直歸るだらうよ」。
「お父さんがお歸りになつたら、何とかお云ひなさるでせうか」。
「なぜ」。
「私がこんな顏をして居ると」。
「だから早くお洗ひと云ふんだねえ」。
「もう何時でせうねえれッ母アさん」。
「直四時だらうよ」。
「日の暮れるのは、此頃ア六時位でせうねえ」。
「あゝ」。
「ですともう、二時間ですねえ」。
「じれつたい娘だねえ。其樣なことアどうでも宜ぢやないかねえ。早くお仕てえば」。

母親は頻りにせき込む容子、娘は始終物思ひ。
「夫ぢや明日どうでも」……
「きまつてるぢやないかねえ、明日と云ふ先方からのお話だもの。そられ父さんがれ歸りなすつたよ」。
「お歸りなさいまし」。
「今歸つた。えらくうつ草臥た」。
「左樣でございませうねえ。あの着物は丁度宜のがございなしたか」。
「夫よまア喜こばつしやれ、丁度あれがのにうつゝけた樣なのがあつたゞ」。
「夫やまア好嘘梅でしたねえ。私やまたどうかと思つて」……
「仲通りの小島屋たら云ふ家でよ、えらくはアで馳走になつたゞ」。
「おや左樣ですか。そりや宜でございましたねえ。何やあのお茶をろしてお火を。」
娘の婚姻に、兩親初め家内のもの、上へ下へと一同の騒ぎ、羨むものは近處の人々。
「太郎左樣門隣りのお娘アとうく」はア嫁入だてえなア」。

「左様だてよ。あの騒ぎてなはァあんちうこんだろ。えらくこつはづむぢやにやァか」。

「あんでもはァ衣裳は東京から取寄せるだてよ」。

「打魂消たこんだなァ、戸長殿の悴ァ大喜びだらう」。

「左様よねえ」。

「あのお娘ァお前ァ生れや東京だてよ」。

「れ袋の連子かねえ」。

「あんでも左様だんべさ」。

「東京のものにやかなはねえなァ。巳がはァいつうか權左衛門の舎弟と、あのお娘の處へまァ遊びに行たゞ、處がお前ァ舎弟がすまして戀歌を唄ふたゞ、さうく、かう云ふ唄だつたよ」。

唄 せどのどん敷石やつこらさとおん持上げたら、下にや蚯蚓めがべちやんらく。

處がよ、お前ァお娘が驚えたの驚かねえのて、はァ打魂消てしまッたゞ」。

「何てよ」。

「東京にや其様な唄ねえてゝよ」。

「あはゝゝゝ夫で持たか」。

「持る處が脇の下から汗ァ出たゞ。巳ァ溜んねえからろつと逃げて來たゞ、處がよお前ァ舎弟もおん逃げて來たゞ。夫からはァあすこへ行にやァだ」。

「どうせはァ私らにや歯が突立たねえだ。まァ村でも戸長殿の悴だから嫁に貰ふだ」。

「さうだてよ。あんなのを嫁に貰や、巳なら桐の箱へ入れて祭つて置くだ」。

鄙も都もおしなべて、實に五月蠅は人の口。岡焼半分若者等が寄るとさわると嫁入話し。噂を聞いて喜ぶのは、娘の兩親と花婿なり。娘は明日の婚姻を、氣に染まねども親の命、はいと其場は承ひて、巳が部屋へと立歸りぬ。髷の結方、櫛簪、どれ宜からんと品定め。着物の良否帶の心配。何かにつけて氣を揉む容子は親への表向。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

裏寂寞しい片田舎、草深き野末。見渡せば牛飼ふ童、耕す村人。眼に附くものは

こんもりと繁つた向ふの森林。青葉隠れに聞ゆる鳥の聲。夫も我身を嘲る鳥、我身の胸を知らぬ山鳩、早く片付け〳〵。

あな忌はし、斯る村山里にと打ちつぶやくは娘の胸に、今しも形づくれる一個の凝結。

「あゝは云つて置いたものゝ、妾ア斯んな田舎に、夫も思ふ同士なら又格別。人が無理に譯もないのに、……あゝ否だ〳〵今夜の中に、れ父さんやおッ母アさんにや濟ないが、寧そ東京へ逃て行つて、而してどうでも身の振方を、……さうしようねえ、……が、さうしたらおッ母アさんが嘸……でも、勘辨して呉るだろ」。

自ら問ひ自ら答へ、其夜の中に身支度なし、何時の間にやら姿を隱した娘、驚いたは兩親。

是れにや屹度仔細があらう

と近所の人の噂とり〳〵。

第四回　寫し出す山師の裏表

表は體裁家の構へ。どう見ても華族の別邸か、左なくは豪商の隱居所かとも思ふほど、立繞したる生垣の、中ぞゆかしき植込の、木立も繁き人出入。主人の殿は日々の如く、手車に乘りて此所彼所奔走するは何の御用か。服裝容貌官吏とも見えず、ものゝ云樣口振り商人とも聞えず。去りとて全く此等のものに、少しも緣故のなき身とも受取れず。何れ頭に紳の字を自らつけるかつけらるゝか、何れかの部の人ならんと、表面の鑑定無理ならず。

主人の居間は這入りてより、南に向つて奥まりし十疊の間。庭には花木四季折々の眺めにあかねど、時候柄とて暑さを厭ひ、たゞ譯もなく青葉隱れに、屢啼く蟬の聲絶ねず。吹入る風に自から世の憂さ忘るる仙境幽界、二間を仕切つて一間の床にかけたる一軸は。流行を追ふてか應擧の筆、古銅の花瓶も何となく、人おどしな飾り立。

今日は主人も在宅の事故、朝より絶間なく忙しいのは小間遣ひ、それ茶それ煙草盆それお取次に返答計。

あの木挽町の小川さんが入らつしやいました。

むゝ此方へお通し申しな、

濱町の山本さんもいらつしやいました。

御一所か。

如何でございますか、只今いらつしやいました。

宜しく此方へ御通し申しな、ろしてれい餘り熱いから氷水を、むゝ宜しく。

小間遣ひの案内に二人の客人主人の部屋へ打通ぬ。

さあどうぞ此方へ。ろれでは却つて何ですから、いえどうも酷い熱さで、そしてまあ朝の中は少しは宜うございますので。左樣です例年もう箱根の方へ參るのですが、今年は又ひどく多忙で、夫れが爲めつひ未だにかう云ふ始末で、どうも溜りませんが、然し其中には一二週間計り閒を偷んで、清見潟邊りから西京四條河原の納涼と出掛やうと思つて居りますが、いやこれとても當にはなりません

夫れは宜いお思ひ付でございます。以前とは違ひまして、もう斯う東海道も全通して見ますれば、何かに附けても好都合で御座いますね。少し此方で計畫を

して置て、地方へでも參るのてえものは、何となく氣掛りなもので。

大きにさうです、どうもその、夫れが爲めに自然躊躇します。

然しお宅は至極閑靜でもございますし、第一庭が大層廣うございますから。

いやもう只だッ廣ひ計りで、仕方があんません。しかし風は感心によくはいります。

夫が何よりでございます、江戸向の方ですと、かうは參りませんで、實にお羨ましい樣なお住居でございますね。

其代りには萬事不自由で、事業家にはどうもいけません。

と云ふ程でもございますまいが、多少其邊もございませうねね。

左樣です、夫れに此頃になるてねと蚊の多いのには殆んど閉口です。

成程さうでございませうね。

話しながら、主人は呼鈴を鳴らして小間遣を呼び、

支那茶を入れて來い。

小間使ははいと應へて立去りぬ。程なく紅茶を持きたり、
村野さんが入ッしやいました。
むゝ彼方へ御通し申して置な、どうもかう云ふ始末で、朝からちつとも出られないんです。
ろりや結搆です、お手廣く成すつて居らつしやるてえと自然御用多で。
と云ふ譯でもありませんが、幾分か其關係もありますねえ。
其又御用多中甚だ恐入つた義を願ひましたが、例の炭鑛の方はどう云ふ御都合でございませうか。
實は先方も餘程迫つて居る樣で、度々私の方へも照會になりましたので、事によりまするとゝ、近々の中にあちらへ參りませうかとも思つて居りまするので、
烏渡伺ひましたが。
成程。いや其方も大抵は宜い樣でございまするが、實は昨日……一昨日でした
か、例の鐵道敷設一件で中洲で恰度出會ひましたが、今少々考へる處もあるから、待て呉れろてえ事でしたが、いやさう云ふ事ですなら、今一應迫つて見ま

せう。
では甚だ恐れ入りましたねえ。何ですか鐵道の方は、署御内決になりましてすか。
さうです兩三日の中に願ひ出る都合にしました。
いやどうも百事蝟集で溜りません。
嘸御多忙でございませう、どうも恐れ入りまするが、さう云ふ御都合になりましたら。
はい、僕より御答へ申す事に致しませう。まあ宜しいやアありませんか。さうですが夫では甚だ失禮を致しました。いつも客來でお排ひ申しませんで。
いえとう致しまして。
客人を見送つて、主人は部屋へ歸り、
村野さんを此方へお通し申しな。
村野は先刻より應接間に待草臥れて、眠氣を催す折から、小間遣が、
此方へどうぞ。

いやに待たせやがつたと云ふ顔付で、主人の部屋へ通り、
昨日は失禮でしたね客來ですか。
なあに今歸つた
相變らず御多忙で。
どうも閉口さ。
箱根はどうです。
其事さ。かう忙がしくッてはいつ行けるか、まだ確定せんな。
昨今は又別だね。
溜らない、どつか逃げ出したい位だ。
これから新坂てえのは如何です。
入谷も時刻は後れたが、兎に角何處出掛やうか。
此間おちやらとおしほがやッて來て是非仁和賀にやア何てッたが燈籠はもう點
たのか。
點た樣だ、昨日中店で正孝に逢つたが、是非なんてッてやアがつた。

正孝も暫間をやめて商法に勉强かねえ。
奴だからみゝつちくやつてるだらう。
おゝ、八幡山が君の宅へ行きアしなかつたか。
來ない。
行く筈だが。
れ葉が例の一件を君に賴むなんてたせ。
恐れ入つたね。
兎も角出よう。
ちよッと待てくれ。
と主人は立つて着物を着更る中、車夫の支度も出來たれば、二人は打乘り出で行
ぬ。
あとには乳母や小間遣が。重荷を下ろしたと云ふ顔で、玄關の式臺の上にぶッす
わり、お嬢さんを綾なす聲姦し。

＊　＊　＊　＊

表向では立派な紳士らしく見ゆれど、裏からはさても氣の毒驚ろく計り。濡手で粟の山ッ子商法、ろれ鐵道それ會社、或は鐵山株券と、天下の富みを已れ一手にしめた顏なる此家の主人。其魂膽を知るものは一夫にても初めの中は知らざりし細君夫婦となつてから此樣なものかと驚いた位。且那の交際は別として、家の諸拂ひ、下女の給金抱への車夫への行渡りも時として滯る苦しさ。出入りの薪屋米屋からも先々月のお拂ひをと、請求されるいたはしさ。呉服屋よりは先月分、小間物屋よりはあと月分、其中には又お茶屋の拂ひ、御門前を通りましたのでと、菓子折を持て來るは初手の事、おかみさん代、女中の使者では折々面皮を缺く事あるべし。内輪はいつも斯の始末。況してや表の金の運轉、主人の腹は四苦八苦。あれをあゝして斯うしてと、日々の心配一方ならず。氣の毒なのは細君、腦病と肺病が年中の附もの。頭痛に即効紙もきかない氣性なれども。流石は女だけまわッた聲で。小間遣ひを呼んで、

清や今日の新聞を持て來ておくれ。あゝ都の花も一緒に、そしてれ前にさう云はいと思つて居たが、お前の事か此都の花に出て居るよ、この手柏兩面鏡と云

ふ面白い表題で。

あら嘘ばつかりおつしやいますこと奥樣。だつても出てるもの、お前あの田舍でお嫁に行くがいやなので逃げて來たんだろ、……ろれ見なさい丸で出て居るもの。どう致しませうね。奥樣本當でございますか。誰が嘘をつくものか。だつても奥樣憎らしいぢやありませんか。そんな有もしないことを、誰が書たんでございませう。

花村居士てゐ餘り聞かない人だよ。人の惡い、生意氣ぢやありませんかね奥樣。ですから新聞屋何かを。誰がそんな事を云つたの。

世間の評判ぢやございませんか。

第五回　寫し出す青樓の裏表

燈籠になき玉菊の來る夜かな。夫は古の句なれども今に變はらぬ此廓の賑ひ。春

の櫻に秋の燈籠何れはあれど、分けて近頃遊園地へ、涼みを兼ての運動とは表向き、裏から廻つてとん〳〵組の彫しく、左さ右さの中の町を横に車の附景氣、いらつしやいの聲と共に、夫れ藝妓呼べ、幇間呼べの愉快筋は、さてどうせう仕方がないの困難筋。夫れ覺えてか知らずにか、浮れ烏の阿呆拂ひ、迷ひも醉ひも醒めて見れば、詰らねえ馬鹿らしゝのほら見たかと、世間の人の口ばちも恐やと氣の附く頃は、手の附處もない所の苦しさ、忽ち胸は道中を初め、眉も八文字を踏み出すやうに成行く悲しさ。夫れ考へては、身の上をたゞしほれけり女郎花。夫れ考へねば實に浮世。角海老の大時計二時を報ずる頃、此家のお職花柳の部屋に、眼がさえて寐られないと云ふ樣な顏で卷烟草をぱかり〳〵夜と共にふかして居るのは、花魁の大事の爲めになる雨村と云ふ客。新造のれ由は。お荷物めがと腹が云ふのあ口でおさへて笑ひにまぎらし。

生憎と又今日はお書から客が落合ふて、本當に仕樣がないの。

夫れでも能く部屋があいてたのう。

そりや違ひまさァね。

なぜ。

他人と親類交際だァ。

誰が親類なんだえ。

誰ですか、部屋へ這入つてるお方がさ、と云ふ世間の噂さ。

甘く云つてらァ、人面白くもない。

だから雨村さんは本當に薄情たと云ふんだわ。ちつたァ花魁の身にもなつて見なさい。

はい恐れ入りました。

雨村は鐵瓶の湯同樣、熱くなつて少しちん〳〵筋の處へ、花柳かろつと這入つて來りしかば、新造のお由、

花魁本當に坊ッちやんにや困るの、種々な駄々をこねて。

花柳はにつこり笑ひながら、

ろんなに世話をやかせるもんぢやァありませんよ、本當に今日はくさ〳〵した

よ。

左樣でせうねえ、でも雨村さんかいらつしつたから澤山御保養なさいまし。止しても下さいれ由どん、間違になりますよ。ねえ雨村さん。

と云ふは假の名で、さう云ふ中にも保養して居るんだもの。

雨村は飴製の狸のぽん〳〵同樣、今迄膨れて居た顏も急に氣拔けのした空氣球の樣になつて言句なし。

どうしたの雨村さん、お株て又思ひ出したんだよ。さう勘忍して頂戴。あのウ氷で冷しませうか。お由どん氷をもつて來て下さいなね。

先刻ね妾がさう申したのに聞かないて、花魁だてえと此通りだもの、斯も現金に違ふもんてせうか」。と云ふ譯ぢやないが、先刻ア何だか。

でございませうよ、餘り邪魔にされない中にとれ……花魁お樂み。雨村さん明日は宜んでせうね、直して置きますよ。

あゝ宜んだよ。

花柳は團扇を持て雨村を扇ぎながら、

失れでも能くいらつしやいましたねえ。先刻お由どんとさう云つてたの、明日は日曜ですからどうだか知れないが、今日はあゝ云つて來てもいらつしやいますまいと思つてたの。

其樣な不實もんたア違はア。

おやさう御免なさい。村野さんもあれッきりでしたねえ。

今日新坂の伊香保へ村野と一所に行つた處が、丁度花洲が來て居てふんづかまつて、

失れ見なさい花洲さんに逢はなきやア來ないんでせう。

能く揚足をとる奴たねえ。

だつても花洲さんがさう云つてましたもの。

ありや商法たもの、さう云はなきやア働きにならないぢやないか。

ですけれど餘り酷いぢやアありませんか。

實は函根へ行てたから。

函根からでも郵便がありますよ。たまにやお手紙位くれたつて罪にもなりますまい、と女の了見では思ひますわ。

さう云やアさう云つた樣なもんだけれど、又さういかないて。
ろりやどうせ妾しの樣なもんですから。
おい其いやみ丈はぬきにしてくれ。
ですけれど物の道理が。
何のまたアない丸でおし問答に來た樣だ。
花柳は笑ひながら。
こんなにお喋舌りをしますれば、啞問答でもないぢやありませんか。
口の減らねえ奴だね。
折柄廊下の外、俄かに騷がしくなり、彼處此處駈廻る足音、男女の聲々打詫る樣
たける聲。
でせうが花魁は只今直ぐ參りますから、後生ですから御待なすつて。
と云ふは新造お由の聲。
花魁が來ても來なくつても宜ぢやないか。
と云ふは花柳の客の聲。

又しても花柳は打つぶやく折、清どんと云へる若いもの廊下の外から、
花魁ちよいと。
花柳は雨村に向ひ、
本當に書生さんにや困るの、少しでも廻らないと直ぐこれですもの。ですから
皆なが貴郎と妾と何だかだてえ騷ぐんですよ。
云ふやつにや云はして置けば宜ひさ。
ですけれど面が憎いぢやありませんか。
仕方がないさ。
夫ぢやちよいと行て來ますから、待て居て下さいな、ね。
曰らも今に鐵盥を持て飛出すよ。
あゝ宜、とも。
とたんばたん出て行く、花柳の草履の音、次第に聞えずなりて、間もなく廊下の
騷ぎもやみぬ。
雨村は床の中で考へたり。

ではまんざらでもないのか知ら。

四邊は次第に寂寞しくなりぬ。聞こゆるものはお定りの按摩の聲と夜廻りの音のみ。時々中の町を人の聲して水道尻の方へ行く足音は、熱さにあきて運動場へぶらんこにでも出掛けくるにやあらん。夏の夜の短くてはや東雲近くなりし頃、花柳は眠た氣なる眼をこすりながら部屋へ歸り、

ちよいと、寐たの。

雨村は來るか〳〵と待ち疲にうと〳〵まどろみしが、花柳にゆり起されて、

むゝもう何時だ。

今四時をうつた計り。

そりや大變だ。村野は歸つたか。

まだでせうが、宜ぢやありませんか。

さうは行かないんだ。今日は歸るとせう。

此時村野は最早支度出來しと見、花柳の部屋へ來り、

君まだ寐てるのか。花魁いゝ加減に賴みますせ。

離さないから困るんだ。

仕樣がないぢやないか。さあ名殘惜くも歸べしだ。」

宜ぢやありませんか。

さうはいかの近日來るから。

村野さんのお株だよ。

なせ。

いつも洒落で胡麻化してるんだもの。

其中に茶屋よりの迎へも來りぬ。さらばと一同打連れて階子段をばたく。

お履物ウ

お早う御座います。

＊　＊　＊　＊　＊

錦の裏と京傳翁の名づけたりし此里の畫の景色は、人樣々思ひ〳〵の云ひたい放題、したい三昧も仕盡して、果は昨夜の客の噂、誰はかうだのあゝだのと惚氣るもあり譏るもあり、笑ふもあり泣もあり。千差萬別いつまでも萬年新造の手練手

管、下らぬ事も其身には又楽みになりはひの、仕舞の札も張強く意氣地をたてゝ進退も、前じて見れば嘘と嘘、其嘘から出た實誠は一つ、だますと云ふに氣がつけば、先づ此里へは用なかるべし

花柳さん昨夜雨村さん來たの。

あゝ困つちまつたの。でも宜鹽梅に坐敷があいて。

よかつたね。あの書生さんのお客はどうしたの。又例の面が憎いぢやありませんか。

お登のお客さんは。

宜鹽梅に歸つちまつたの。

雨村さんも荷だね。姿しや見て居ても肩が張るよ。

本當にさあんな飛脚もないもんだよ。金づくなりやころねえ白玉さん。

さうさ金がなくなりや誰が搏ふもんか。

第六回　寫し出す客の裏表

年の頃は三十前後とも見受たり　背は餘り高からず低からず、顔おも長にして色

上海金港堂
郵花本部
樂屋中

淺黒く、眼もと口もと何處となくしまつた處に愛嬌のある優男。結城の蚊がすりに白縮の兵子帶をしめ、時計の金鎖をぐる〳〵卷、帽子はお約束の鼠色の山高、煙草入れは此間中店の岡田で十圓で買つた計り。下駄も萬屋へ別誂へとまで行屆ない身のこしらへ。萬端抜け目のない證は知らず、表からはどうしても大家の若旦那さまか、左なくは銀行會社で、葉振りの能い社員か手代か、ひよつとしたら米屋町の人でゝもあるかと思ふ客。兩國の寄席立花屋の木戸へ來り下足番に、

樂屋に誰が來てるか。

と左も横柄に尋ね、

さうか遊船が來てるか。夫れぢや樂屋へ通してくんな。

と木戸を拂つて樂屋へ通りけるに、高坐ではまだ前坐のお喋舌り最中、樂屋で斯と見て崩した膝を据り直し、

いよ旦那いらつしやいまし。先日は如何でございましたか、其後角海老の方はちとお伴を致したいものでげすな。

はゝゝさつぱり行かないのさ。

とうですか。
全く。
夫れぢや旦那行つてやらないなア嘘ですせ。貴郎にも似合ない。あの寸法てえなアなみ一通りぢやありませんもの。
焚附けるな。
いや本當に私しが貴郎を焚附けた處が、早い話が彼處で遊べる譯なもんでもなし、只もうにようてなことを云つて、夫で當人が面喰らつて引下る計り、仕方がないぢやありませんか。
だつても又樂み自ら其中にありて、當込筋の藝妓か何かを生捕つて、心意氣を迂鳴るなんざア、餘り仕方がなくもないぢやないか。
處ぢ大違ひの鬼子母神もちと古うがすが、さうは行かないから憐れ憫然ぢやありませんか。勿卒かしい人はあのずどんを聞たら、お譬と間違へる位嚴し刎ね方。何だつてもう當人が面喰ッまちッて、早早あすこをにげの道鎖。ほい度胸のないのにやア驚きやした位なので、旦那なんぢたア全く分けが違ひまさアねえ。これ

ん計りもうそ八幡を申さない處が。
うるさいな。
全くいらつしたのでせう。
實は行た。
そうれ御覽なさい。酷いぢや有ませんかお一人で。
昨日雨村を連れ出して、新坂の温泉へ行つた處が花洲がお客で來て居たもんだからつひふんづかまつて。
夫ぢや猶の事、お供をしたうがしたねえ。
處が師匠の話しが出て、今度ア是非伴れて來てくれ何てたよ。
嬉しいね本當ですか。
實はかう云ふ口もあるんだが乘る氣はないか。
へえどんな口で、
師匠と一座をしたいてえ、女の子があると思し召せ。
ふん年頃は

夫れ聞かれては少し色消しだが。
れしほさん、おなほさん、延信さんでもあるまいしと誰ですか。
誰ッで先づ昔の新造さ。
矢張り中ですか。
ひゝ中は中だが門跡の中だ。
門跡、旦那おからかひだと、罰金をとります世。
本當の事だ。
一體まあ種は何です。
あすこでまッちを賣てる婆ア的よ。
情けねえ、大方そんな下げだらうと思つて居た。
はゝゝ夫りや串戯だが、終ねたら生稻へつきあつて呉れないか。
結構、心得ましたぢやアてな寸法で宜しいはア。
なにも捨挺を跳らなくもいゝぢやねえ。
つひこれが當人の病氣で。

ぢやア待てるよ。
客は立つて出て行くと間もなく樂屋で、
お中入り。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

扇子一本でお喋舌り一遍。夫れで浮世を渡るが商賣なれば、口の達者さ舌の廻り加減中々素人の及ぶ處にあらず。樂屋の中で客のよしあし婦人の詮義、誰れが來てるの彼れが來てるのと、前座中間の口うるさく、昨宵の世界を高座へ擔ぎ出し夫れを話して惚氣ても、知らぬがおとけの面白さ、やんやと手を拍つ客のお目出度さ、客の歸つた其後で惡口半分店卸し。
えゝおい今の金ちやん（客の事）は何だろ
何だか知らねえが濱町邊の客が村野さんとか云ふんだろ。
餘程金十（馬鹿）だね。
家の師匠が何でも一二度吉原へ、お供をしたあとがあるとか云ッとッたッけ。
あれぢや餘り持てめえなア。

あの又氣をり加減てえなアねえなぢやねえか。
左樣よ、どうせろくでもねえ玉だらうよ。
生稻へ行たのか。
さうだろ。
此間だお前お客をあすこへ行て大きに器量を下けたせ。
どうしたんだ。
神田の中村さんと云ふんだがね、新石町の樂屋へ來て、是れからちよいと生稻までつきあつてくれてえのので、お前山の手を二つ計り拔いて直と飛び出したのは豪勢宜かつたが。からもう其中村てえのが、寸法の分らねえ客でよ、……それも宜さ、夫で以てびりにこだはるんだから手も附けられねね、是非忠義を盡して呉ろッて已にこれ〳〵よ、先がお前小万さんだらうぢやねねか、當人と當人となら知らねえ事、已らが中へ這入てそれん計りで口も利めえだらうぢやねえか。
違へねえ、大きに肩が張らア。
初めの中は宜、加減に綾をつて居たが、段々金ちやんの眼の色が變つて來る始末

よ。
困つたなア。夫で以て片々の小万ちやんの方てえば、大きにだれ氣味で以てつんすましよ。其時の已らの苦しさは先づなかつたね。
むゝ〳〵。
斯てあるべきにあらざればと、已らア氣力をつけて仕方がないから、小萬さんに金錢の事は云はないで渡つて見た處が、果して下がれを食たらうぢやねえか。
器量を下げたね。
下げたの下げねえッてお話にならない位さ、夫れんばかりならまだ宜が、小萬ちやん口が惡いから、あのお方はれ師匠さんのお客ですか、さゞ骨が折れませうねえとまで云はれて見れば、穴へも這入りてえ位さ、宜加減に其場はお茶を濁して引下つたがねえ、已ら本當にあんな困つた事アなかつたよ。
已らア夫れよりまだ酷い事があら。いつうか並木へ金ちやんが來てこれから吉原へてえ寸法、心得たりと大飲みに飲み込んで安尾張へ押上つたのよ。すると已らは店へぐれてるもんだから、眞逆しみつたれな遊びも出來ないと思つて、行當

りも萬端、夫々義理をして可なり大店を出した處が、翌る朝になつてから金ちやんが氣の毒だが少しどうかならないかてえ始末よ。困つたらうぢやないか。夫れもさ一兩か二兩の事なら兎も角も、五兩某がしと云ふんだから始末は行けねえやあ。

むゝ困るねえ。

仕方がないから新造にこれ〳〵と話した處が、お前さんが受合つて呉れるなら貸し申しませうてえので、よん處なくお前新造にたのんで引下つて來たがねえ、間が惡いてえと時々此樣な事があるから困るよ。此間も下谷の金ちやんが大蔵省へ勤めてるんだが、王子へ行かないかてえので、上野から滝車で行たのは宜つたが、先きに遠出の當込筋だから無論婦人を同道よ。己らア一人ほつちりで以て其處いらア中熱いのに引廻はされて、落は祝儀なしで僕ア海老屋で宿るから歸れさ、何だつて餘り嚴しいと思つたから、婦人にさう云つた處が氣の毒さうに、だまつて一圓くれたがねえ、本當に分らねえ金ちやんに出ッくはすと災難だよ。夫れでも當人は一かど取り卷連の氣になつて、天竺木綿同樣自分計り襄氣に巾を利かして居るのア、面が憎いぢやアないか此樣な奴の内幕を新聞へでも出してやつたら、惚れた婦人も寐返りだらう。

第七回　寫し出す待合の裏表

表はお約束の建仁寺か何かの生垣。通りよりは少し引込で一そして這入り口。人にちよいと知れる樣な知れないやうな、其處が身上。奥ゆかしく一搆へも行々し。閑靜かと思へば閑靜でもなく、騷々しいかと思へば騷々敷もなく。別莊かと問へば別莊にあらずと云ふ。茶寮かと尋れば茶寮でもなしと答ふ。はて、不審かるまでもなし。書風もひねつた看板に御待合。これは〳〵。さてこそ怪物今のはなしか柳橋。氣に入らぬ風もあらうに。

廣からねども家の内、何となく行屆いた間取。四疊半の小座敷それが茶の間。主人がすきか、客の好みか、時々たてる煎茶萬別。人さま〴〵の遊蕩樂。窓を明くれば大川より持て來る風にすゞ蟲の聲も興あり。月一點水にうつりて水か、月。つきぬ眺めは此家の專賣。あかぬ別れは客への特許。

主人はさすが夫れ者のはて、不思議に客の受けの能さ。溢れる計りの愛嬌が人の

溢さぬ待遇ぶり。延喜に門へ鹽花を振蒔く世辭に自然と繁昌。これなら福福長者の番頭。女中一同。ずらりとならんで、入らつしやい。御機嫌やうのかけ聲は人力車の聲と共に絶えぬも無理ならず。

「いらつしやい。おやまアお珍らしい。村野さん先日は」。

と女中がかけ聲。主女は蚤取眼、飛で出で。

「おやどうなすつたかと思つてましたよ。今日はれ一人でさあどうぞ此方へ。

女中は先へ出で。

「何ですね村野さんいやアに笑つてさ」。

「お前の口許につまみ喰ひのかたみがあるからよ」。

「人聞のわるい。お止しなさいなね」。

「でもさうだもの」。

「憚かりさま」。

「禮を云つてらア」。

「人を本當に」。

「覺えて居ろか」。

「宜うございますよ」。

「はい〳〵御免なさいまし」。

「本當にどうしたら」。

「また宜うございますよか」。

「知りませんよ」。

這入り口から。女中にからかひつゝ二階の風入れの好き座敷。いや風は禁句。眺めの能き小座敷へ陣取、帽子羽織の甲冑を脱で、先づ揚るが煙草ののろし。

「先日はどうも。どうなさいました、あれからア」。

「いや實に大亂痴氣」。

「でございましたろね。何れ何處へか」。

「むゝ雨村が是非吉原へつき合へてえので」。

「あれから又ア」。

「さうよ困つちまつた」。

「御盛ですねえとうも。夫れぢや船さんも御一所に」。
「むゝうありや別だ。昨宵生稻へ連れて行つた」。
「さうですか。吟中さんが宜敷く申して下さいてえました」。
「どうしてるかあれッきりちつとも逢はないから」。
「相變らず浮れてますよ」。
「仕様がないね。何故藝人はあゝだろ」。
「だつても貴君から云ふ商賣をして居りやア仕方がありませんやア」。
「夫れもさうかね。時に誰か一人」。
「お後から又今日はてえのぢやないんですか」。
「誰も來ねえんだ。誰れにしたら宜からう」。
「例のは」。
「ありやいけねえ」。
「なぜ」。
「少し譯あり番附。こりや間違ひだよ、其積りで」。

「ほゝ御丁寧に恐れ入ます。ぢやア誰にしませうか」。
「左様さね。しめ吉はどうだえ」。
「さうですね。ですがあの妓はお止しなさい。蟲が附いてますよ」。
「小花は」。
「代言屋さんか何かでなくつちや。いやに理屈ッぽいぢやありませんか」。
「さうさ三吉は」。
「酒の上が惡うございますよ」。
「困つたね小今は」。
「俳優を喰つてますよ」。
「生意氣だね。今度出た福助てえのは」。
「赤筋が何でも尻押へだと云ふ事ですからお止しなさい」。
「いよ〳〵困つたね。誰が宜からう」。
「左様ですねえ小竹さんは如何ですか」。
「ま何しろ君の宜様にしてくれ」。

「ぢやア少々お待なすつて下さいまし。只今直と」。

如才内儀が萬端飲込み。階子段をとん〳〵〳〵。下へ下りて火鉢の側へ熱さうにべたり。先づ一服と引き寄せる煙管と煙草。

＊　＊　＊　＊　＊

内儀は今飲みかけた烟草の吸殻をとんとはたき、ちよと舌うち。同時に感める眉。

暫時くして又思ひ返して莞爾、夫れでもまだ小聲。

「こまつたね村アさんにやア」。

女中が側から差出口。

「どなたかいらつしやるんですか」。

「其事さお一人だがね。誰にせうね。兎も角何かあり合せで早くお二階へ」。

「畏まりました」。

「魚屋さんと都合が惡るいね。明日アア十四日、さうだね、宜やどうせ一所に拂ふから魚屋さんへさう云つておさしみを二人前計り取て來ておくれな、大急ぎで。さう〳〵八百屋さんへも、さうだね、夫れから序に、誰にしたら宜からう。宜やそりやまア後でも」。

「夫れぢや魚屋さんへ」。

「あゝさう云つて、お酒は宜ね」。

「まだ宜しうございませう」。

「村野さんはなぜあんなに客なんだろ。宜や今日は思ふ樣貧してやらう。誰かに通して置いて」。

「苦勞人にも似合ませんね」。

「ほんたうにしみッたれだよ。一番こか二番こか負けるとぴく〳〵してるんだもの」。

「夫れで以てびりにこだわるんですね。」

「仕樣がありやアしないんだ」。

「此間も小萬ちやんに何だかひどく彈かれた樣でしたね」。

「一體づう〳〵しいんだもの幾ら何だつて百も出さないで夫れでもつて」。

「赤坂へでも行きア宜んですね」。

「なんぼ赤坂でも村野さんの樣では。さうら餘り譏るもんだからくしやみをしてるよへえれ手が鳴るよ」。

女中は慌たゞしく二階へ上り、用事を聞いて內儀へ復命。

「何だえ」。

「あなたにちよいと」。

「うるさいね。夫ぢや小德さんへは義理はあるが今少し都合がわるいし、駒吉さんは居ないだらうね。小鈴さんは少しきまりの惡い事があるしと。赤ちやんなら宜が、此間だあんな生意氣な事云つたから意地にも掛けてやりやしない」。

「ほんたうにさですね。何ぼ賣れるからつてあんな面の憎い藝妓も無いもんですね」。

「口をかけてやるやらないなア此方の權だのに、當人がいやにすまして」。

「あんな仕打てなアある譯なもんぢや有ませんね」。

「夫れてえなア少しでも此方で滯ほるか何かするでねと猶馬鹿にしてるんだよ。今に思ふさま赤耻をかゝしてやらア」。

「夫れが宜んですね、女中なんてえものなア皆な房州かどつかの山奥から來てゐるものかとでも思つてるのか碌に口も利アしないんですよ。偶にアねお内儀さん愛嬌にね世辭位ね。何も云つて貰ひ度あありませんが」。

「あんな奴ア搆はないからお客に何でも惡く云つてやるが宜よ」。

「左樣ですねえ」

「宜よ妾が行かう、急しないッたら廻井戸へでも行た氣になつてるッ。夫れぢや宜から義理もあるし兎も角小德さんを直とかけて來てお呉れな。無かつたら三ちやんを。あゝさう」。

二階を向いて煙草を輪に吹き。

「叩いたつて此方だつて種々。またくしやをしてるよ。村野さんはほんたうに長ッ尻のくせにせつかちだよ」。

「本當に手ばかり」

第八回　寫し出す宗教家の裏表

實に世の移りかはりほど恐ろしきものはあらじ。昔は老人の仕樣事なさに珠數つ

ま繰つて後生願ひも、煎じて見れば孫子に家督を讓つて世の中に用なければなり。今は若もの丶神信心。用の多いのに「あアめん」も又不思議。さるにても、看經の間に嫁をいぢめる婆。婿を困らせる爺。祈禱の會で男女の秘密談。それで極樂天堂も覺束なし。

こゝに何某と云へる青年、いつの頃よりか發菩提心。明けても暮れても聖書と首つ引。是れを見聞く近處の人々、今の若さに可哀さうに耶蘇教にれ這入りなすつたかえ。心配なは二親、困つたことだと眉に皺。案じなさんなお父さん、耶蘇教になるのは坊主になるのとは違がひますとすました顏の息子殿。」

夫れでもなんだか氣になるのは親心。可愛い子にはたび〳〵の意見。でも當世は宗教家でなければ少ない信用。これで仕上げた身代こそ金城鐵壁。夫れで無ければ砂の上の家。とさかし氣な返答ぶり。あゝ止なんと親父も發心。類は友垣の交際中間を呼び集へての今日も感じ話し。

「どうもその私共がこれ迄の犯せる罪を悔改め、神の御前で懺悔するまでの信仰は中々容易な事では得られませんね。成程私共は今も猶罪を犯しつゝある身では御ざいますが併しながら常に省みて悔改めます。不信者は罪を犯しつゝも猶悔改めず、神の御前で懺悔致しません。ですから彼等の爲す處は常に罪惡邪慾夫れ等の者が彼等の肉體と靈魂を離れません。これを去りこれを除かんとするには即ち神により神に仕へ神に祈りを捧げるの外はありませんと思ひます」。

「左樣ですね私共も常に信仰が薄くして時々自分躓き、且つ人をも躓かすこともありますが、兎に角今貴君のお話しになつた通り、神の前で悔改めまする丈の信仰があります。此間も築地の村野と云ふ私しの親類へ參りまして神の道を話しました處が大きに感じまして是非又ゆつくり伺ひませうッてましたが、どうも其當時の弊風として酒を飲んだり藝娼妓を買たりしなければ交際が出來ない樣に心得て居る人の多いのには困りますね。否これを知りつゝも即ち悔改めないんですね。村野なんぞは隨分品行上に於ては人の譏りを免れないんです。否寧ろ積極的の人物ですが、私が思ふのには かう云ふ人の其犯せる罪を悔改め神を信ずるやうになりますのは却つて通常人よりは著るしき進歩が見えますかと思ひます」。

「實にさうです。さう云ふ人を悔改めさせ、神の榮光を知らしむるのが私共信者の責、即ち神に仕ふるものゝ義務かと思ひます。ですがかう云ふ人はどうも最初肉體の好む處の酒を禁じ煙草を止すとはひどく窮屈がります。けれども段々其久しきに堪へたなら其心は全く消え失せます。是等の事は私共もこれまで經驗した處で知つて居ります。要するに最も精神の墮落した時が最も神に仕ふるの決心を與へませうね」。

「左樣それに又世の謂はゆる舊守的の人は信者となるを以て何か國體風俗でも害するものゝ樣に思ひますにはどうも困りますね。元より神の榮光は是等迷夢を抱けるものゝ睡を覺ますの時有りませうが夫等の爲め彼の或る新聞の如き女學校のとばッちりより我々神聖なる教會までも攻擊を試み、神の限りなき榮光を汚さんとするに至るは憎むべき次第ぢやありませんか」。

「實にあんな無責任な事を云ひふらして多くの人を躓かすには困りますね。或る書生の如きは我々教會へ集るのを以て若き男女の見合處か何かの樣な妄想を抱いて居る樣な人物があります。第一まあかうです。君の教會には別嬪が居るか。

別嬪が居りや行かう。丸で遊廓か何かの樣に思つてるんです。精神の墮落も又甚だしいぢやありませんか。かう云ふ樣な始末ですから世は益々澆季に、人情益々輕薄に流れ、德義の如きは殆ど地を拂ふてないのです。實に嘆かはしいですね」。

と互に問ひ互に語る處、何處までも道德堅固、身に一點の瑕瑾なき樣に見受らるれど。住吉のうらのみる目は耻かしき玉を欺く蓮の露。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

葷酒山門に入るを許るさずと云ふお寺も臺處では鰹節を卷紙と云ひ、蛸を天蓋と呼ぶ。世を捨た法師も女郎花に見惚れては馬よりをちこち人の見なば咎めんとかこち顏。表面は堅きもなかは實にくされ玉子。安息日を教會で守るお嬢さんも時としては俳優の評判に余念なく、夫れに美術學の一端と云へば云へ、寫眞の買入れに內命を受けて下女が奔走も余りと云へば念入り過ぎ。下宿屋住居の男女交際、手を携へて散步も宜けれど雁鍋岡村での會食の末案じられる若い身空。會友となれば兄弟姉妹、親も承知で訪ひ音信れ、是非今晩は祈禱會へ、御一所に參りませ

う、と連立たのが縁の端。飛んだ浮名のたちまちに教會中の耳にきいり豆のはなし沙汰にも斷えた醜聞。こんな噂さの多い世の中。戸は立てられね人の口々。堅いも餘り當てにはならず。信者と云ふも偽信者。他人に分らぬ腹の中、知る人ぞ知る涙花江のよしあしがきの書き盡されぬ世の有樣。夫でも當人は聖書に曰く、神を信せよ。人を信せば頼く處あるべし。我々は實に罪人なればと濟した顔で德義を捨てるも餘り榮にもならの葉のこの手の人の往々あるにはさても氣の毒、笑止なれ。

「ですが君信者となつたらそりやどうしても幾分か信用が違ふよ。早い話しが不信者だてえと文明的の人ならどうしたつて信を置かないもの、底で僕なんぞはまあ幾分か社會に立て事業でも起し、商法でも營まうと云ふんだから、精神は兎も角も表面は義理にも信者にならなけりや行ない。それに君の知つてる小林なんぞ見給へ。全く種はさうだもの信者だ〳〵てえのが人にも信用を得、從つて金の運轉も利く樣に成たのだが、奴だつて木石ならぬ身だもの、たまにやア隱然と藝妓買位はやるさ。だがね感心に酒だけは止してるよ」。

どうして君藝妓買所か、此間妙な所から小林が吉原へ遊びに行たてえとを聞たから僕ア奴を詰問したら最初は中々云はないのさ」。

「へえ」。

「所が段々かうだあゝだと罪蹟を擧げた所が、奴ア云ふにやア『成程行たにや違ひないが、僕はそんな猥褻な事はしない。彼等が賤業をしてるのが可哀想だから神の道を說いて早く娼妓なんぞは止める樣にと云つて聞かしてやつたんだ』と云ふ口供さ」。

「馬鹿にしてるぢやねえか、だがねえお互に信者だ、何だつても云はゞ政畧だからね」。

「ろりや左樣さ」。

「甘く其體面を維持してるのと維持しないのとの差さ」。

「幾ら堅く云つたつて世の中は石部金吉でも渡れないからねえ」。

「夫れにしても大分信者が殖えて來たね」。

「其筈さ、君二三が月も續けて教會へ行きア直ぐ洗禮を受けられるんだもの」。

「これを名けて速成信者か」。
「はゝゝゝ違ひない。時に彼の女學生はどうだえ」。
「むゝ例のか」。
「家ア何處かしら」。
「番町邊だてえとだ」。
「君「戀」しちやアいけないせ」。
「串戯云つちやアいけない」。
「何だか怪しいね」。
「どちらが怪しいのか」。
當人達さへ怪しむ位。況してや世間の人、風説の實に無理ならぬ事ぞかし。とは云へ、皆が皆まで必ずさうと云ふにはあらず。世の道德堅固の信者だち、必ず惡しうな思ひ給ひそ。あなかしこ「あアめん」。

園ひもの

上　これは〳〵花の吉野屋の繁盛

氣に入ぬ風もあらうに柳橋の裏河岸に、表は御約束の江一格子、壁も提燈のぶらりとした暮し、夫人はいつも手に三味線をとり留めた家業も内妾もの、もとを糺せば左褄にて候ふの水の濁りに足を洗ふてていと辭し、旦那一人を後生大事に守り、袋の中の鼠忠義者の下女を相手に、すたれかゝつた毛糸を、あみの目から漏る魚心あれば水心の旦那の覺ゑも吉野山、峰の白雲ふみ分けて入りにし費用は高嫌はず、かり込んだあとは散髪屋同様奇麗さつぱり拂つて、暮が來ようが、盆が來ようが、夫れにはお搏ひ內儀も中々出來た人、妾手かけは男の働き恪氣嫉妬は婦人のたしなみと、夫れが偽か誠か知らないが、先づ表向きでもさうされてゝ見ると、氣の毒なは園はれの身、かうしていつまでも旦那の世話になり、何から何までして頂いては、御新造さんは御得心でも、どんな立派な御手許でも余り冥加にあまつたお話し夫れでは妾が濟まぬから、旦那が入らつしつたらお話し申して、

何か手頃な商法でも初めませうと思つたは今日此の頃、恰度旦那も來た折を幸ひ、さてかうかうして見たいと圍ひものゝ相談に、旦那は、何が宜らうといふ、圍者は、矢張り手なれた藝妓屋を致したうございます。旦那、夫れではお前が骨が折れるだらふと云ふ、圍ひもの、いえ〳〵抱の二人か三人も置きまして、妾がそれを追ひ廻はして居りますれば、別段骨も折れませぬ。そんならお前の宜様に兎も角下でしらへをして置きなさい。畏まりましたと圍ひものはにて〳〵もの。翌日から其の支度にかゝる事とは知らぬ本宅の内儀。あゝして置いても種々と余計な入費もかゝる事故、寧そ此家へ呼び入れたら宜いではございませぬかと旦那へ相談、お前の云ふのも一理あり、だがあれの云ふのもこれ〳〵だが、どうしたものか途方に迷ふと旦那の心配。そんな事ならさうなさいまし、あの子も折角思ひ立た事を。お前も家の爲めを思ひ。あの子だつて家の爲めを思ふて。何れを何れ花菖蒲。引ぞ煩ふ胸の中。何故お前は恪氣せぬ、恪氣せぬのが私や怨めしい。でも其樣な事致しましては。已にはちつとも遠慮は入らぬ、さあたつた今此處で恪氣してくれ、夫れを規摸に已もあれの處へ云つて相談して來よう。それ計かりはどうぞ。いや〳〵夫れでは已が出ていかれぬ。と云ふ。何の貴郎が男の働きで行つしやるのに。さうではないれ前のお蔭だ。勿體ない事おつしやいます。困たなあ。れくるまが參りました。どうぞあの子の方へも。行かにやアならないのかえ。どうぞ。と賴んで妾宅へ行つて貰ふ内儀のさばけた氣質。身體も別段惡くもないとは近處の噂。柳橋では内儀のさばけた仕打に、旦那夫れでは御新造さんへ妾が濟みませぬからどうぞあちらへ。や夫れ云つてくれるな已が困る、何でも藝妓屋を出しなさい。さう致しましては。宜いから初めなさい。でも。はて分らないてえば。是れからとう〳〵初めたのは藝妓屋。主人は昔しとつた杵つかの間も人の氣をそらさぬお世辭もの。抱への藝妓も主人を見習ひても。感心な客扱かひ、お茶屋の受けも宵の口から、切り火のかちをきあげる勢ひ。夫で名も吉野屋の小みねとて、土地で市利の一人となりけり。」表向は藝妓屋、内實は妾宅入費少なの商法筋。夫れで家内にいさくさ無ければ、旦那の心中思ひやられぬと人々は申す。さるにても又其の身になりては物足らぬ心地の内儀と圍ひものに堰止められし水、いつか思の土手を破つて、抱への吉次の柵へ引括つた藻屑拂ひも遣らぬ間に增す

水嵐、逆巻く波のなみ〳〵ならぬ物思ひは小峯一人。二人の交際を夫れと早川の、早くも覺つた樣子なれども云はぬは花を持たせて知らぬ顏。夫れは初めの事、今は世間の義理にも御新造さんへ對しても、須磨の浦風うらまれんも無念、飼犬に手をかまれんもうたてき事なれ、いでや其の方法もがなと氣を揉む處へ、からり、姉さん今日はと這入て來たのは幇間の金中。宜い處へ金中さん實はお前さんに少し御相談申したい事があるので。おつと皆までの給ふな、旦那の一件で貴女が氣を紅葉にてりす女とはちと古句。夫れでお前の智慧を借りて奇麗さつぱりあの子の手をきりの葉に秋の來る樣に。如何にも其儀は拙心得たり、飛鳥の川のあすにもあれ旦那へ見參位賴政の袈を射て功名手柄はまたゝく中。そんなら金中さん是非お賴み申します。去るかはりには菖蒲の前の取持は。夫れは屹度妾が致しませう。いや夫れさへ叶へて來れるなら、海老のおぼろの身を粉にしても必ず忠義を盡しませう。夫れ聞いたら妾しもあんどんの明りもたち。拙も蠟燭のしん實嬉しい褒美にあり附く一件。間違ひない樣金中さん。其の御心配は御無用々々々約束つがへて立分れたのは幇間の金中。此處が一番男の賣處、はてどうしたら宜

からうか。と來るとはなしにうかーうかとくるまやに背後から聲かけられて、吃驚振り返つて見れば旦那。これは〳〵何處かへ御幸、拙御陪乘かなはぬにや。誰かと思へば獅子金中のむしーむしと熱いぢやねえか、夫れで讀めたり中洲邊の夕涼み。月に遊はゞの御趣向、いよ感心のなる感心は誰もする、もし旦那是非お供の黑主文屋ならぬ今夜は、氣も康秀のやす〳〵と御逗留。はて五月蠅そんなら參れとの下知。心得ましたと旦那の側へ相乘の乘地もの、處で旦那あたら夜の月と花とを同じくは心知られん人に見せばや、何れ誰かを招き猫なら小峯さんを。賴まれたな。賴まれませぬがものゝ順序でございますから。古い句に、先賴む椎の木もあり夏木立、れ前が已にいやにしゐの氣があやしい。とは又お情けない御推察、拙に於ては其の椎の實の一粒なりとも嘘偽りは申しませぬ。そんなら吉次を呼びに遣るから。では餘り。出羽も奥州も入らぬ、已は吉次にきつい執心。さては何と申すお咎に預つて恐れ入りますす、さては是れから中洲まで。云ふにや及ぶものども急げ。急ぎ候ほどに早着きにけり、旦那何れか宜けん。無論一瓢亭。れつと車夫相棒を其處へ突たり。二日三日相變らずの駄洒落は恐れるでござりませ。

うが君が代は駄洒落石の巌となりて。夏蛆てえば。しかの給ふは無理ならず、お。つと姉さん本所かね、どつか神田じやない神棚のすゞしいれ坐敷へ。此方へ入らつしやいまし。夫れでは旦那吉次ちやんを。ひゝ早く〳〵。畏りぬ、ても宜い月ではござりませぬか。此の月を下物に一杯酌むも興あり。何よりの馳走は松のはさむ月、御免遊ばせ。見事々々今一つ。さう重ねて酔へもんとは旦那お情けない。いや此風が千雨どうも云へぬ。これから家根船も又一興ではござりませぬか。水神邊り漕つくるも面白し。兎も角も夫れでは吉ちやんの來るを相圖に、船の仕度をさせませうか。夫れ宜からん。どの號令。萬端飲込みの金中。さて此處だと廊下の外で考へもの。判じ畫の得も云はれぬ心地。折から階子段をとん〳〵。ろりやこそお出だ、旦那もしあの足音を。知ッてる〳〵。

下　さりとはあまりな籠抜計畧

あぢきなき世を嘲ちて嵯峨の奥の墨染の身も、元はと云へば佛をすゝめた妓王。夫れにも似たる小峯。あんまりなは吉次、聞ねませぬは旦那と、明暮心に思はざるにはあらざれども、夫れとあかして云はぬは云ふにいや増す思ひ。暫間の金中

を頼んでの相談も、根がはなれ業の事にしあれば、仕損じ有りはせぬかと心配。困つた事ぞと頭痛。氣分の惡いも妾ゆゑと、知つて居ながらぼけた顔。がらり格子戸開けて歸つて來たのは吉次。姉さん只今歸りました。大層ゆつくりだつたね、遠出かね。はあ水神へ。水神もないもんだと云ふは小峰の腹の蟲、殺して云はぬが心の我慢。中洲から。船で本當に姉さん詰らない目にあつたの。夫れは妾が云ふてとゝ口まで出たが、いやかういつては抜裏、思案してもどり、さう妾や又吉ちやんの事だから定めしれ樂み筋かと思つてたの。どうして姉さん大違ひ。云ふは云つたものゝ、何となくきまり惡るく、本當に熱いぢやありませんか。とお茶を濁して着かへる着物。てもづう〳〵しい人を盲か何ぞのやうに、馬鹿にするにも程がある。と袁え立つは小峯の胸。藥鑵の癇に障つたか、つと立て簞笥からそろり取り出す着物、支度もそこ〳〵、清や入力をさう云つてお出で。さてはと吉次は胸に釘うたがひながらも、姉さんどちらへ。ちよいと其處まで。お熱いのに晩におしなさいなね。でも宜んだが一體は昨日中に行なくつちやならないのを怠れて居たから、いつそ今から行つて來やう。別條なき返答ぶり。妾が疑心暗鬼か、

夫れともあゝは云ふものゝ汕断を見抜き、水神へ行つて昨夜の始末を根ほり葉ほり、蓮の實のほぐくつた上、吉ちやんてれでもかとだまし討か、もしさうなつた暁には然かせん。と羽織の紐の胸を括つた吉次。其の中に人力車も來りぬ。がら〳〵と出でゝ行つた後は暫く無言。日長のつれ〳〵と昨宵の疲れに、朋輩の妓も吉次もころり。外に餘念もなつ草や、武士共のゆめのあと、さきかまはず寐入り花。間もなく表で吉次さん柳光亭から。御苦勞さんと下女の挨拶。もしもし吉次さん。あいよ。ゆり起されてきよろり。旦那はどうなすつのもうお歸りになつたの、下女は不審。となたも吉ちやん入らつしやりやしないのに。うゝお前はお清どんそんなら今のは夢なのか、本當に人を、妾やァ呼驚したよ。あら夢ぢやないんですよ、本當吉次さん柳光亭から直と。さうもう何時。今しがた五時うつた計りですよ。自分ながら本當に能く寐たね。お疲れのせいか何だかうなされてゐましたね。嘘ばつかりお清どん何か行つてたか。あら本當ですよ何ですか分りませんがね大層お苦しさうでしたから、お起し申しませうかと思ひましたが。ろして起してくれないのお清どんが惡いよ。だつても折角お寐て居らつしやるのに。柳

光亭さん。と考へて、お客さんはどなた、聞かなかつたの。はあ聞きませんでした。夫れぢやお清どん行つて來るから姉さんがお歸りになつたら、さう云つて下さいよ。勝とん御苦勞さん柳光亭さんまで。

切り火かち〳〵延喜を附け、出て行く吉次。柳光亭の帳場で、おかみさんありがたう。お熱い事ねえ。お客さんはさうお二階へ。とん〳〵上つて見れば、おや姉さん金中さんまあどうしたの。妾や又どこだか知らと思つたの。云ふものゝ實は胸をき〳〵、今見た夢の覺めぬやうに、又こんな夢、とぼけて居てもどこか疵もつすね加減、間の惡るさうに尻もじ〳〵。見て取る小峯は知らぬ顏。吉ちやんお前この御新造さんを御存じかえ。問はれて吉次は、はあい。答へたものゝ赤らむ顏。御存じないのでせうね、でなけりや此處へ來られた義理ぢやないもの、と云ふと何だか妾しが大層な敵役の樣ですが、吉ちやんお前餘ッ程お目出度よ。姉さん何が。と据ゑた腹。そりや吉ちやんお前さんにも似合はないと云ふもの。其樣事今姉さんに云ふのは嘘でせう、兎も角も私にお任せなさい。と留める金中。御新造さんのある事も、又姉さんのある事もお前さんは何も角も能く御存じの上で、

御世話になつてる旦那の事、いゝえさお聞きなさゝ私が中へ這入たらば、必ず惡くは計らひませんから、兎も角も一端奇麗に此處できれて下さいな、さうして貰はないてへと、峰ちやんが第一御新造さんへ濟まないからッて、此の御熱いのに態々御新造さんをこちらへ御招ぎ申してお前への賴み、私も又かうやつて藝人の片ッ端へも這入り、あゝだかうだと皆さんに御厄負になつて居りや、誰れ惡しかれとは思はないが、たゞ皆さんの圓く納まる事ならと、賴まれて見りやあ人事の樣でもなし、御新造さんとても又さう申しちや失禮ですが、能くお分りになつたお方ですから、無理にとおつしやらないが、其處は吉ちやんお前の胸にある事でさう云ふ譯には行ないとか、又聞き分けてさしませうとか何とか、其處の挨拶を吉ちやん聞かして下さいな。道ならぬ道に迷ふた吉次。右左より筋道を立て、無理にとは云はないが。と賴むが如く詰られて見れば、穴へも入り度き心地、いらへせんにも面伏なく、差俯伏て噛しめる半けち、暫らくあつてつく吐呼吸。姉さん堪忍して下さい。もはやうるみ辭、だ——旦那の事はおもひ切ります、御新造さんもどうぞこれまでのいたづらを御ゆるしなすつて下さいまし、其のお詫には

わたしが今此處でかう髪を。と云ひさしてほろり、なぜこんな淺猿しい心、ろになつたか。と涙ぐみ、金中さん後の處はお前さんどうぞ皆さんへ宜しき樣御取り成し下さい、妾はもう何にも申しません。と立ち上るを金中袂を押へて、まあ吉ちやんお待なさい、お前さんとさうさす位なら、何もこんないやな事を云ふまでもなし、又御新造さんを態々お呼申すまでもないのさ、だが峯ちやんの了見では、さうはしたくないから落合て、お前の胸も聞いた上で、後々の事も極めたいと云ふのだからして吉ちやん其處此處を惡く思つちや行ないよ、何もこゝで切れたからッて其の儘打ちやつて置く譯なものでもなし、其處には又私も附てる事だからして、能ッくお前さんの腹で考へて事をしないてへとお前さんの爲にもなりませんよ。と云ひ離されてわッと計り、姉さん何から何まで御心配をかけながら、今まであなたを袖にしましたのは妾のひがみ、此上如何樣ともあなたの仰しやる儘に致しますから、今までの事はどうぞ水の泡とお許しなすつて下さいまし。とさし出す首きるに切られぬ小峯の苦しさ。さう事が分つて見れば、妾も又御新造さんへお賴み申して兎も角も、致しますから、其の事なら別に御相談なくつても妾

からお話し申しませうと思つて居りました。小峯さんも吉次さんとやらも、氣六づかしい宿を、夫れ程まで思つて下さる御親切にあまへ、是れからそんないさかひなしに三人此處で同胞の盃をして、一先目出度手を拍つて貰ひませうと云ふ。金中至極結搆と小躍なしていきなり捨挺を二つ三つ。此勢に引立られて白けた坐敷も惣氣になり、俄かに市のさかえ住吉まつお目出度や、しやんと舞納たのは四五日あと。吉次もいよ〳〵廢業して何の某と堅氣な表札をかけるとまで纏つた相談、夫れには何處か小意氣な家を。と云ふに吉次は一つ返事、そんなら妾が家を尋ねて來ませう。と行つたまゝ隱した姿。其の日も暮れ翌日乃晩になつても歸らぬ始末。小峯は心配、どうしたんだろ、眞逆詰らない事はしないだろ、夫れともあゝ云つて妾たちを訛して置き、何處でか旦那と合引の計畧か、何れにしても氣掛り。と本宅へ使を遣り旦那の樣子を聞いて見るに、別段異條なし。さても不思議と氣を揉む處へ郵便、名宛を見れば吉次なり。

私し事これまで一方ならぬ御世話に相成候上、此度は又かう云ふ始末何共面目無く候まゝ、鎌倉の尼寺へ參り、世を忍び申し候覺悟にてお斷り申さず出立致し候。何卒不悪御許し下され度、何れ委細は彼地着、身の上相定り次第郵便にて御知らせ申すべく候まゝ、御新造さん初め金中さんへも宜敷御傳へ下され度、先づは右取急ぎ要用のみ途中にて。

見るより小峯は口惜しがり、えゝ後かつたなせ吉ちやん其樣了見になつたの、可哀さうに今の若さにも似合はない、どうせうねえと悔んでも及ばず、夫れなりけりで全くさうかと思つて居ると大違ひ、實は靜岡で藝妓をして居るとさ。

この話しさくやの夢

上

先づ梅を見てから這入る戸口かな。か……なおつと洋犬公か、洋犬に耳あり聞き、付けて來る處は爭はれねえものだ。やいぢやれるな、わん的退散どうもならぬ。底で數寄屋さまのお座敷は此處いらだが、はッてな看經讀誦の鈴の音と云ふやつが聞こえねえのはお留守かしら、……若旦那。

誰だえ。

えゝ露月で……

臘月……臘月なを師走さ、何して今頃遣來のだえ。

いやとうも恐れみ恐れみも申し若旦那、これは又何たる世界でげすか。お早々からお机もたれの頬杖つきと只もう閑靜と計りで、古池や狐舞込む年の暮なんてえ御趣向で……

しッ俗物仕樣がねえなあ、人が折角名趣向を案じて居るのに……

とは少しも存し申ざずこれは失敬。名趣向てえのは矢張りいわしこの類で……

よしく。

全く何んでげすか當て見やせうか……左樣さねえ、あなたの事ですから汽車のあと押しが初まらねえからあれを初めやうかなんてえ慾張つた事ではなからうし、と云つて伏待月のそら、何によ南翠さんの書いた近藤達夫の東京四里四方を不夜城にするッてッた樣な御趣向をお考へでもなからうしと、はゝあ分りやした。若旦那すッかり分りやした。圖星連中の新年宴會に立茶番の案文寅の年てえのきかして貰我か何んかを出して、あなたが例の五郎でげせう、違ひやしたか。

まあちよいとさう云つた樣なもんだが、實ア何にた堀越が歸へつて來るまでにてえので。守田からも話しがあつたので何に、何んか俗物を驚かすてッた樣な新作ものをてゐので、據ろなく此間へだッから掛ッて居るのさ。

なある、底で以てちッとも出ずの大八幡、まあさ一間籠りの臺帳柱暦てゐ御趣向で……

よし〳〵。

何んしろあなたのれ腕で何にか活歴もの〻極く洒好みの大時代てえのへ、ちよいと二葉町のが艶をつけて堀越が、よしもと首を出げた日にやア大變でげすな。ぢやア何んでげすか、あなたのが出來上り次第直ぐ堀越へ通して蓋を開けるッた樣な寸法なッてるのでげせう。

さうさ、だから困ッてるのさ。夫に實ア演藝會からも今度ア是非ッてッた樣な事を云ッて來るし、

なあるる。

これもこれまで甘く逃げて居たんだから今度ア何してもやアならないしてッたア樣な始末で、いやはや眼が廻る計りさ、だもんだからちッとも出られないのよ。

なぜと人目は包んで置いて内々お浮れ筋なんてね憲法はいつ發布になりやしたのか知ら、若旦那さりとては餘りつれない、ねッとこ〻で柳はみどりなんと胡麻化してはいけやせんせ。

どうして〳〵。

全く……

さうさ。

ぢやア申しやせうか。

何を……

何をッて若旦那、あなたさうおッしやッても昨宵あなた布袋屋へ入らッしやいましたらう。いゝえちやんと種が上ッてるから恐いもんで　よ……

大違ひさ。

とれつしやるとあなたの鬼子母神か知れやせんと洒落たくなりやすねね。あなたそりや行けませんや。あなたが何にとおつしやつてもそりや蛇の道はへびに新にして又日に新なりで湯の盤てはなくッて十の九まであなたの運動が拙に知れる處が又是れ不思議なりさ。

處が一向不思議ぢやアねえから可笑しくも何ともねえ。ぢやア何んたねえ大方誰かに聞いたな。

聞かなくッても夫れが知れない樣な事では今日露月の名分が立ちやせん……まあさ黙ってお聞きなさいッたら、あなたが誰を呼んで何を召し上ってとうなすッたまでちやんと拙へ通ってるから恐ろしいぢやがアせんか。だから古人も言はすや天知る地知るさ、おしるはどんさ。

うるせえなア。

まあさどんにも證據にもあなたが雲隱れにし夜半の次第までちやんとつき留めて拙心得て居やすよさあ若旦那お約束通り罰金をお出しなさい。お出しなさらないてえと、拙排はず吐鳴りますよ。

仕方がねえ、ぢやアあげ出しをおごらうか。

あけ出し願ひ下げにしやせう。

ぢや宇治の里、

御免蒙むりやせう。

いやアにつけ込むな……ぢやア……と、

お待なさい若旦那ちよいと宜い處がありやすよ。」

何處だえ。

どこッてちよいと乙ですよ。劇なら左樣さ爰は先づお人拂ひと言ふ處だが、ちよいと失禮お耳を……ねえ……宜うがせう。

喃漢ととうく釣り出される奴かな。

だけれどもあなた急にれ人が悪くなりましたせ。

うッぷ、笑はせやアがらア。

誰だえ其處で笑ッてるなア。

えゝ小僧の長松で……

長松、なんだえぐづく笑やアがッて。

只今お店へ本郷の春野さんがお出になりました。

歸ッたか。

いゝえ。

出る矢先へ氣の利かないねえ春野さんたア……

何よ、そら春の山人の事さ。

なある、例の小説をかく先生ですか。
さうさ。
留主だとれ云ひなさいなねえ。
いけませんや若旦那此坊さんの……
何んだ坊さんたア、
だッてもその……來てるのを知ッてますもの……うして若旦那は居らッしやいますと常どんが判然と言ッちまひましたものう。
判然なんてえ誰れに聞いたか。
圓遊がさう言ひました。圓遊のはも一つ悶然がつきます、へえ。
よく嘘舌りやアがる……ちやア宜からこちらへお通し申しな。そしておい湯を持つて來な。
かしこまりました
と立ち上る小僧じろり尻目に見送つて露月は其處いらちよいと愛嬌にいじくッて居る處へ、おほんせき拂ひに先を拂はせて這入て來たのは誰れ、本郷の春の山人

これはくと鼻をいじッて座に着きたり。

中

座に着くまでも春野はぐつと片附けて、
此の中は失禮致しました。でも宜い鹽梅に陽氣があつたかいので、
と挨拶ろこくちよいと右の足を横へはみ出して、
失禮ッ御免下さい、少しすぼんを細く仕立させましたのでどうも……
それはくどうも御自由になさい。
はッ……梅も南向きの方はちらほら咲き初めた樣でございますな。
左樣ですねえ、此の分なら追々龜井戸の世界になりやせう。
何んかお面白い御趣向でも……
いやも相變らずて。
例の脚本は如何でムりますか。
夫です　實ア大頭痛さてえのは何しろ急場だから、
急場とは牛馬の事でげせう。

何を云つてる、駄洒落はあと廻しにして、おい〳〵和尚、茶でも入れさつせえ。
おつと茶用かなもちと古うがすかな。
ちと處か大ふるさ。
夫れぢや茶をおほふるまひと致しやせうか。
よし〳〵勝手にさつせえ。
はッはッは。
もし若旦那ちよいと、其……恐れ入ります、お茶入れてゐのを、
無性きめすにえゝ立ちませ、えゝでは已らの役は宜くねえなア。
そこで拙がかう見になる處は丸で寺島寫でせう。
おつと寺島も宜が、素湯こぼしの壁みよでしなざアひどく恐れるなア。
や、これは失禮、ちよいと〳〵若旦那其何を……
何をッて何んだえ、
おつと宜ろしいなひ三紅染だ。
おい〳〵和尚己らのはんけちをおッかぶせて見て居るやつもねえもんぢやねか。

これを和國橋と見立てくれねえぢや若旦那恨みでげすよ。ま第一此桃色がお誂へぢやがアせんか。當意卽妙靈月えらいッとおほめなすッて宜うがせう。
仕樣がねねなアとう〳〵はんけちを代なしにしやアがつた。
ぢやアお下りを拙頂戴しやせうか。
ちよッこまッた奴だねえ。是れで以て色氣があるんだから始末におひねえ。
そりやもうねえ有難い事にや……
何が難有いんだえ。
御冤遊はせ、あなた失禮もう宜うがすよ、さあ〳〵おすわんなさい。
これは〳〵。
和尚年がいもなくよく番くるわせをやるぢやねえか。
平に〳〵この通りちやんと過つて改むるに、はゞかり樣若旦那……
何んだよう。
恐れ入りやす其お茶入れてえのを、
又か。

ほい失禮、今度ァ拙立ちやせう。
これが即ち立つての賴みか。
よいしよ、ぢやァ拙ァ畏まつたと受けやせうか。
よし〳〵おッと其處いらァむやみにいぢくッちやァ行けないよ。
はい又た小言か、又かり決して相成らぢさ、またがり手斧ではどんなものでげせう。
仕樣がねえなァ。
れつと有るぢゃ。
何が……
何がッて御膳かう云ふものをだまッて置くなざァ若旦那あなたにも似合ひなさらない不注意ぢやがァせんか。
何んだゃ〳〵。
何んだえッてあて〻御覽なさい。
大方何んだらう此間六阿彌陀横町の得知子の店で買て來て置た各國名產入りの

曲物だらう。
大當り當りやした。
當りやした……かう當りやしたなざァ和尙嬉しいねえ。だがそいつァお茶受けでもねえなァ。
だからさ、お茶受でさらく。無理とは思はねど、おつとこりやァまちがひさ。
まちがい殿樣のほん元松前殿樣鯡でお茶受けなざァ……若旦那あなたの前ですけれども洒落までが澁うがせう。
うるせえなァ。
うるせゐたッて何んだッてあなた今歲ァ二十三年でげせう。
仕樣がねえなァ。
まあさァお聞きなさいなね既に國會が開けるてえ世の中に、誰あらう恐れ多くも大日本東京市日本橋區本町一丁目で、質兩替商近江屋の若旦那幸二郎樣誹名三松子ともおつしやるお方がさ、新年早々奥の一間へ玉子のとぢてもりの筆おッ取りの臺帳認めなざァ大きに世間が不景氣になりやす。夫れにま第一其お机

の上ほ何でげすか墨かと思やいんきなやがァせんか。
おい〳〵れ前が這入ッて來ると耳がぐわん〳〵して仕様がねえ。
ちやァ是から少し早いが梅見がてら運動武者盛遠と洒落やせうかねえ。若旦那
宜うがせう何處か繰出し、幸手は奥州街道さ、ねゑ宜うがせう何んですとえ、
宜かねえ。おうやおや、洒落は兎も角撫はず出ないッたら若旦那、拙がけさか
らさう云つてるのにおつと靜に〳〵耳がぐわん〳〵するッ。
はッはッは、のべつですねえ。
春野子この木魚はどうかなるめえか。
左様ですねね。
木魚たァ抑お情ねえなァ。若旦那さあお出かけなさいつたらお出なさい。
何んだ其聲は、
これが地聲で赤いのが緋鯉さ。
仕様アねえなアお前が居るとこれ見ねえな、つばきの鏡で部屋中が眞つ闇にな
つちまッたせ。

いよッてりや嚴しい何んかいぶしなさつたね。處でいぶしのさしも草かね。
さしもしらし〳〵い和尚でも是にや閉口たらう。
大閉口あなたお洒落が上りましたねね。
上つたら袈をふり直して春野子どうです。これから運動てえのは。
結搆ですなア。早速お伴致しませう。
ちや本當でげすが、へん嬉しいねえ。若旦那お召しはどちらでお羽織は、
宜よ其處いらアにやアないてえば。
ぢやアお女中を呼びやせうか。
よく世話をやきたがるなア。
これが當人の生つきで……ちよいと〳〵お松どん。
騒ぐしいなア。
失禮おつと御苦勞さん、へえ今日はお松どん、若旦那がこれからちよいと其御
運動にいらつしやるので、はア御新調の御召を……お羽織はどちらに。丸で
一人で饒舌つてやアがる……あの松やこれからちよいと出るから着物と羽織

を……

かしてまりました。

どう〳〵こん負けして和尚に引張り出される樣な事になつちまつた。

實はそちらへかお出になり御計畫で居らッしやッたのでせう。

若旦那でゝすか、大計畫あッたのさ。全くあなたか入ッしやッたので、卽ちけ

いかくか開ひた位なもんで……

仕樣かねえア。

はッはッは。

おつとお松どん御苦勞さん、はアこちらへも置きなすッて、れゝやこれはどう

も御膳ッお羽織は七子の角通しで第一この紋が氣に入つたね。えいよッ嬉しい

ねえ。そしてお召はてねと一樂のかはり綿で、お下着は古代更紗の二枚重ね、

お摸樣はなある牡丹に唐獅子にアお思ひ付き今年ア竹に寅の年さ、御膳宜ねね

お襟袢は、へえていつア乙ですぬね。此形はなあるこれで以てすッと成田屋を

きかした處なざアどうも御趣向按摩按腹でげすな。そちらのはえお胴着でこれ

はッと……

れい〳〵さう下の帶まで引張り出しちやア仕樣がねえなア。

これは失禮。だけれども私ッしやア何んだか嬉しいねね。若旦那あなたこれを

來月になりやアそつくり拙にやらうてえのてげせう。嬉しいね。

誰がそんな奴アあるものか。

おゝやおや……ぢやア何んでげすなお羽織だけ、

慾張ッてやがるなア。

と云ふ譯ぢやアかアせんが、物の道理かさ、ねえ本鄕の旦那。

左樣さねね。

ろんな道理は日本橋通りにもねねなア。

よいしよ若旦那あなた串戲ぢやありませんせ。大層れ洒落か上りましたねえ。

上ッたなざア和尚そも〳〵乃公を知らないね。

へえ〳〵。

良幾すら此間れ辭儀をしたらうぢやねえか。

さァ大變風が變ッて來やしたぜ。
風は上野か淺草かなんざァ和尚どうだえ。
おゝやおや何處でも宜うがす。かうなつたら搏はねねからさァ若旦那お出かけなさッいたらお出なさい。
おい〳〵待ちねえ、煙草入れた〳〵。
おつとお序に御懷中は、
ろれは宜し〳〵。
夫れでまづ大安心、とかう振り返へるのか木の頭で、さァ參りやせう。

下

梅には早き龜井戸道をぶらり〳〵。一人は濃茶の山高帽子に小紋の羽織着流し。一人は同しく縞羅紗の鳥うち帽子に洋服打扮。今一人は芭蕉頭巾に道行振りと云ふ拵への三人連れ、世の中の不景氣には少しも感じのない能樂人、只さへ強い押し上の土手田甫を吹き來る北風の寒さには、さすが顏を蹙めて。
若旦那兎も角も春の事です、幾ら寒くッても此處いらへ人の出たけが不思議ぢ

やァがァせんか、おつと寒むッ……
どうだえ和尚風流の骨髓に此處いらだらう。
左樣、この寒い處を辛防して居るなさァ先づ俗物にやァ出來ない藝です。何んしる若旦那あなたがさつき梅屋敷で堀り出した一件を尋ね出さうぢやァせんか。
そら例の箱屋か何んかを供につれの頭巾眼深かの尤物さ。ありやァ何んでけせ、慥か柳橋てもと小三代さんてッたのさ。今新橋で何よそれ愛吉さんさ。
和尚知つてのか。
よかァ知りやせんか、柳橋で何んても一二度一座をした事があつたつけ。
はゝァ道理で何んだか知つた顏だと思つたが、なある武藏屋の小三代さんですか
夫れぢやあなた御存じて……
なに知つてると云ふ譯ではないが、少し妙な譯があつて知つてますが、あの子は三松さん感心な孝行娘で新聞ものにすりやァ左樣さねえ十回たッぷりと云ふ淚主眼の履歷があるのさ、

へゐゝ何んしろ春野子がろれを知つてるなざア怪しいなア。
餘ッ程怪しい男之助さ、何んなら日記につけて置きやせうか。
よし〳〵。
又初めりめしたねえ。夫れでは僕はにッと笑ッて引込みませうか。
よいしよ、あなたも中々隅にやア置けやせんな。たまにやア義務ですから。
義務でげすからも恐れ入つたねえ。あなた幇間は孝作をひいきなさいますか。
ませッけへしてとう〳〵、本文が通らなくなつちまつた……處で和尚幾ら何んで
も人間の寒陋しはまだ賣れめえからどッかへ這入らうかのウ。
其事々々、兎も角もねゑ春野さん……
左樣さねえ只三松さんの御意の通り。
どこにせう。
無論橋本でげせう、おつと橋本御用心。
ほい滓みか……たまにやア駄洒落も用をなすのウ。
そりやア元より名吟で雨を降せる類ひさ。

はッはッは。
さう思ッとりや先づたしかさ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

入らッしやいッ。
へえ今日は。
おやお師匠さん先刻ッから。
あゝこれ……さあ若旦那かうお出なさいまし兎角此事嬉しいねゑ若旦那。
何んだ人のもゝッたぶつゝ突て、
だッてもあなたがだまッてらッしやるからさ。
だれも何んとも云やアしないぢやねえか。
誰も何んとも云はないからさ。
何を云つてるのか。
嬉しいねえ若旦那向ふは田甫でげせう。
さうさ。

烏が飛んでます御覽なさいてえば。
おい〳〵寒いに障子をあける奴もねえもんぢやねえか。
はいうッかり、ぢやアか閉めやせうかねえ。これが本當の硝子越しかね。
矢張り硝子から覗いてやアがる。
硝子は硝子白紙は白紙。
仕樣がねえなア。和尙々々〳〵お誂へが來たよ。
そりや大變、あの來ましたか、ほんとに何が來ましたか。
喰氣にかけたらすぐこれさ。
おゝやおや……おつと姉さんはゞかりさま、今度ア本當來にましたよ。へえ若旦那。姉さんこの若旦那は三松さんと仰しやつて、俳優は成田屋贔負で居らッしッて、お宅は本町……
おい〳〵曉舌つて露を溢すなざア恐れるなア。
失禮、憚さま姉さん。若旦那え、れ酌……てちらのは本鄕の春野さんてえお方で、拙は森下の露月……

おや左樣でムいますか、どうか宜しく。
あい若旦那え憚かりさま。おつとこれは恐れ入りやす、姉さんはゞかりさま。
おつと……少しぬるウがすな。最少し姉さんあつくして頂きたいねえ。
それからちよいと……これは若旦那から……
處でちよいと姉さんれ耳を……これでも齒齋の衛生は自慢ぢやねえが行き屆いてやすから御安心なさい。
おほゝう宜かッたねね。
ねえ……宜うがすか。
はあ畏まりました。
若旦那。
うるせいなア。
何んかお奢んなさいッたら。
誰が。
例のが來てますよ。柳橋のが來てますッたら若旦那。

騒々しいなア。何處に。

どこにッてまア黙ッてらッしやいッたら。

お前が一人で喋舌つてるなんぢやねえか。

ほい失禮。ぢやア只今御覽に入れますよ。

と夢中の露月右と左と取り違へて、左のから紙狂言までがからりと外れて現れた

はこはそもいかに、こはそも如何に、幸二郎が爲めには現在叔父の久兵衛平素の

頑固へ疑をかけ、苦りきつて此方をねめつけ、

やい幸二郎其のざまは何んだ。今日も朝から露月と出たと云ふから適切りかう

だらうと思ッて先きへ廻ッて先刻ッから爰で待つて居るとも知らず、こんなや

つ等に取り卷かれ毎日々々と浮れて居やアがつて、親重代の近江屋の暖簾をと

うする積りだ、馬鹿野郎め。さあ己れと一緒にこれから直に家へ歸るが宜い……

おい其處な狸坊主め、これから恰れても決して本町へは出入りならんぞ。今爰

で己れが引導渡してやる。其處な洋服を着てる人もさうだ以來決して近江屋の

家の敷居をまたいでもらうまい、商人の家へ一體書生なざあ用かない筈。これ

までもいつか云はうかと思ッたれど、婦人でも手前にはな親一人付てるか

らッと思てだまッて居たがこれ幸二郎よく聞くが宜い、手前の親父が去年死ぬ

とき何んと云つて死んだか知つてるか、……えゝ……知るまい……失れを恰れ

ヤアがッて、何だお袋一人だと思ッて親類までを馬鹿にして、内を外の道樂三

昧、今日は幾日だと思ッてやアがる。未だに親類へも年始に出ないやつがある

ものか。又お袋もお袋だ。こんな貌見た樣な坊主が毎日出這入するのをだまつ

て置く奴があるものか。手前達ア何も知るまいと思ッと居るがな。何もかも皆

なこちらにやアちやんと聞いて知つてるぞ。これまでも方々の女郎や藝妓に引

掛ッたのも今日こゝへ來たのも、幸二郎手前ア何んと思ッて居る、みんな此奴

等二人の芝居に掛ッてるのだ。直ぐ隣りの座敷へ先刻ッから來て手前等を待つ

て居る婦人はなあ柳橋の藝妓で……聞けば本郷の……お前の情婦だと云ふ事ぢ

やねえか……夫れを何んだ此坊主と馴れ合つて幸二郎貴樣に取り持ち、近江屋

の身代までも一とゝなめにせうと計盡んで掛ッてやアがる太い奴等だぞ。それも

知らねえで、宜氣になつて一緒にわいく騒いでやアがる。幸二郎手前も餘ッ

程れ目出度奴だなア……これさ露月さんか痔げつさんか知らねえがよくも幸二郎を馬鹿にしてくれたな……己れに今から云はれても返へす言葉はあるまい……

……一言もなからう……返事をさつせえ。

へえ〳〵誠に何とも申し譯はでざりませぬ。

さうたらう申し譯があるならア聞かう、……聞きませう……申し譯がなからう……おい女中其處なからかみをあけてくれ……さつきの婦人は居るか……なに居ない……さうだらう……何んでも此處にやア居られないだらう……居る奴ア人間ぢやねえ……人間の皮をかむッた畜生だ、獸物だ、狸か貂だ……己れが云ふ事腹が立つたら誰でもこゝで立涙に言ひ譯して見ろ……出來まいが、……なに今の婦人が手紙を書て置て歸たと、どうせろくな事ぢやアなからう……おい〳〵女中……婦人はいつ歸つた……なに今急いで車で歸つたと……何んだ……これ見ろあんな奴でせえ氣まりが惡いと見ねて詫び手書を書てにけて行つたぢやアねえか……夫れに手前等何んだな餘ッ程づう〳〵しい奴等ぢやねえか……えゝ……こんなに云はれてもきまりが惡いとも恥かしいとも氣の毒とも何んと

も思はねえのか。情ない奴等ぢやアないか……えゝ……おいそんな根性ぢやア仕樣がねねせ。これからちと魂を入れ替へるが宜い。顏も上げぬはさすがに面目ないのか……それでもちッたア恥を知つてるか困つた奴だなア。

と意見の節々鋸りもて身をつんさかるゝより切なければ、幸二郎はじめ春野露月兩人は只管頭を疊にすりつけ、これまてなせし我身の惡謀知れぬと思ひしは大きな不覺、あゝ怖ろしや南無阿彌と恐れ入つてゞ居たりける。と見しは昨夜の夢のあと曉き告ぐる鐘の音に、女房眼覺し、

もし夜が明けましたよ。

とゆり起されてきよろり、

そんなら今のは夢であつたか、はて梅見がわるい、鶴龜々〳〵、

だまされ狸

いよッ、ろれは若旦那あなた、ま、どうなすッたのですか。

どうなすッたの、かうなすッたのッて、さうむやみになすりつけられちや困るねね。

てれは失禮、直ぐてれさ、全く何處へなんてえのも大きな野莽でげすか、何しろ今頃此處いらお歩行ては、おッとおしろいは顔に塗るなんさァ行けやせんせ、と、かう、ま、若旦那のこッてすから、貧中ぬかりなく差を拵へて置て、置てと云ッても帆かけて走られちや困りやすよ、ねえ此位に先づ地形を堅めて置て、何てすとえ、置ては子に隨へと貧中受けやせんねえ、全く何處へ、貧中見奉る處ては左樣さねえ、當てゝ見やせうか、お待ちなさい、何か趣向して後に何てッた樣な、趣きが將にありやすが、夫とも何處か樣を替へて土手ぶらつきの腹拵へ、貧中參れッなんてッた樣なかたむきもありやすが、何しろ丑寅は星が惡ふがすから、此處ん處ては左樣さねえ、……

おい〳〵人立ちがして困るちやねえか、何しろ其貧中金光りの大藥鑵を振り廻して、湯氣の出る程喋舌り立られちや方かつかねえ、兎も角來ざッせえ。結構お供しやせう。へん嬉しいねえ、ぢや此方へ。

串戲ぢやねえ、おい〳〵、今日は珍らしく仙骨を帶ひて出て來たんたから、そんな俗界へは足を蹈み入れねえのさ。

へえ、ぢや何でげすか、角兵衛見た樣に手を踏み入れるんでげすか、何しろあなたの仙骨にやア驚きやしたよ、いつかもそら土手でお目に掛ッた時なんてねもなア、貧中近年にない驚き方でしたねえ。あのもうろく頭巾すッとこ冠りの千草の股引、だぶ〳〵はきのぢん〳〵端折のてく〳〵歩行で、釣道具か何かをあなた御持ちでしたらう、これから向島へてえのて、貧中供奉を仰せつけられ土手下でごみをかぶッて、一日鯉鈎りの立番さ、こひづり位、まアさ器量を下けたてとア有りやせんねえ、夫もさ、たまにやア愛嬌に、はせでも掛れは大きに氣のほうし方もありやすか、生憎と何にもかゝらないのさ、そこではせ心得ぬとあなたが堀越を氣取りなすッたので、貧中直くにはせも慮外も願みずお願ひ申し奉つると、

一つ嘆願に及んだので、あなたかやッともうこれにやアこひ〳〵したと、まアさ。お聞きなさい、鈎をおやめなすッて、そら何とか云ひましたッけねえ、あの時あすこへ行ッしッて、大きな處を三尾でしたッけねえ、お買ひなすッて、持て行ッしッたことが有りやしたッけが、あん時ア實に驚きやしたねえ。それからてゐもなア、若旦那未だに貧中向島のお供てえと思ひ出しやすよ、全く神經に感じたのでけすなア。

能く覺えてやアがるな、今日は全くさう云ふ處と筋か違ふよ、ずッと俗を離れて高尚な世界さ。

へえ、ちや何でげすか、慾を離れて高尚寺の入道前の腕白なんてッた樣な御趣向ぢやないのでげすな、たか何だか怪しいねえ、はッてなかう行くてえと山谷、眞逆破れ幇間たから本場の藪岡町へ張り替へに行くなんてえ、惡る落ぢやがなアまいねゐはッてなおからねえなア。

やアさにまッて來さッし。

たッても何だか心細いねえ、おウや、をや、又向島でげすか、驚きやしたねえ、

鯉釣りだきア、ぬきでげすせ。

ぬきなら鰌さ、

どぢやうにもかうしやうにも、鯉にや恐れ入たね。

宜ぢやねえか、鈎ねえさきから水ッ端で鯉だ〳〵と、跳ねてるなんてえなア。

よいしよ、ですが、此處を渡ッた日にやア大變でげすからねえ、尤も大變の事え云ふてゐと鬼が笑ひやす、まアさ、夫れとも有馬へ御供しやせうか、有馬紀の國蜜柑船さ、何しろ陽氣で宜ぢやがアせんか、それとも柳畠にしやせうか、奥にしやすか。

行ねえ〳〵何れも大俗ぢや、宜ことがあるよ、ぢき其處さ、橋を渡ッて直ぐ左ッ側さねえ、そらいつか師匠に話したッけねえ、例のよ。

はッ例の品の宜人柄な花屋敷の一件、分りやしたが、あのどうなすッて……

夫もさ、妙なこッて知れたのさ、ぢきこの先に居るのよ。

此先てゐと矢張り今戸でげすかえ、さうですか、わッしやア今戸に知らずに居りやしたが、夫れぢや何でげせう、あなたのこッてすから、そこん處はずッとお

ぬかりなく。

夫れがさ、まださうは行かないのさ。

處で拙に忠義を盡せとの御上意、心得たり飲み込みやしたよ、さうさあなたがさう仰しやるてえと、何だか此邊で見た事があるやうだて、はッてな、お待ちなさい、何しろありや若旦那宜い持ち物でッせ、全く油ぢやありやせんよ、早い處があれがさ、藝妓衆とか何とか云ふんなら又幇間もありやすが何しろ屋敷出か何かで、あの子のわ父さんがお約束の商法をなすッてすッた處から、お一人のお嬢さんを妾か何かに出したと云た樣な面影がありやすよ、まアさ、岐度あれて以ッてれとなしい樣で、どうかするてえと、時々あの可愛らしい愛嬌のある眼尻をぐッとつり上げて、其くせ何にも云はないのさ、其處でほろりと千金の涙をこぼして、若旦那あなたと、恨み文句もさうさたんとは云はないねえ、ちよいと若旦那あの何か妾がれ氣に召さないことでもおあんなさるのですか、ものなれません妾ゆゑ、どうぞ堪忍して下さいとか、何とか云ふッ位が精一杯、夫もどうかするてえと得云はないで以ッて、お約束のほつれ髪を二三本噛み切る位のことで、ちよ

いとあなたを、まアさ、何しやすよ、夫で以ッて。

おい〳〵さう何もかも一人で飲込んじまッちや仕樣がなえな、まアさ、さう云ッた樣なのがどッかにないだらうか知らてえのさ。

おウや、おや、ぢや〳〵、何でげすか、まだ分らないのでげすかさうよ。

大方そんな下だらうと思ッて居やした、全く……全くは八月の一日だらうぢやねえか、

違へねえはッはッは全く何處へ。

まアさ宜から來さッせえ。

何だか怪しいねえ。

ちッとも怪しかないのさ、おい〳〵師匠々々どうしたてえのだ。

だッてもあなた其お寺へ入ッしやるんですか。さうさ。

ろりや驚いたねえ、驚きやしたねえ、れ寺參りとア、ろも〳〵恐れ入たねえ。

何もさう額を叩くにや當らねえ、だから云はねばことか、俗物は話せねねてえ

のた、師匠も十九世紀の幇間だらうぢやねねか、此の位に事をやッて置かねねでは、子々孫々末代の名折れ。

なぞと勇氣をおつけ下すッても、こいッアどうも浮れやせんな、おウや、おや、あけが長屋へ這入ッた樣にどうでも引張り込まれるんでげすか、情ねえなあ。

まア宜いさねえ、師匠これだ見さッせね、これが谷素外の碑さ。

へえなアる、妙でげすな。

話せねえなア、妙てえ奴があるもんか。

ですが、何だか分りやせんからねえ、こりやア恐れ入ッた、へえ素外てねなア、へえ何でげすかねえ」。

困ッた手合だねえ素外は素外さ、俳人さ、俳人てえなや俳諧師さ、俳諧師てえなあ發句讀さ。

なアる、ぢやア矢張初雪や何が何しやて何とらてえ中間でげすな、恐れ入ッたねえ。

何もそんなに恐れ入らなくッても宜よ。さうさ、

見さッし、かう此釜はどうだえ、例の釜七さ。

へえ釜屋堀の。

初代の建立と見えて、此所に銘があるて。

ぢや其叔父は見えやせんか。

叔父どうだか知れねえが、何しろ文字が有よ。

よいしよ驚きやしたねえ。

何しろこん中に草の生へてる處なざアないねえ。

なアるでげすな、勿論鎌に草は附ものたが。

宜しくかう向ふの石碑はどうだえ、あの苔の鹽梅なんてえもなア、凡そ時代が知れねえなア。

左樣でげすな、こりや恐れ入ッた。

夫よりや師匠この五輪はどうだえ、なアる、まりやア何でも餘ッ程古いものに違いないねえ、丸で字が讀めねえ處なざア、奥ゆかしいぢやねえか。

不思議でげすな、おウや、おや。

向ふの倒れかゝッた石碑はだれんだらう、何だ享保元とだけは讀めるが、あとは消ッちまッた處は宜ねえ、何しろから云ふ形は今時たづねたッてないねえ、此方のは、ちよいと〳〵師匠この碑はどうだえ、ちよいと乙に出來てるぢやねえか。

へえなァる、面白がすな、餘ッ程變ッてますね。」

變ッてるよ此奴ァ宜い、成程妙ッ、どうも宜ねえ、あちらの方はどうか知ら。

こりや恐れ入ッた、ひとく恐れ入りやしたねえ、

ちよいと若旦那、今日の仙骨は中々いつかの鯉釣り位ぢやがァせんねえ、餘ッ程念入でげすねえ。

ずッとあれよりァ高尚に行てるのさ、何しろ此墓廻りなんてえ奴ァ、そも〳〵俗物にやァ出來ねえ藝さ。

さうですとも、あたりまいのものぢや先出來やせんねえ、何だッて桃や櫻たァ違ッて、楸の花ぢや浮れやせんからねえ。

處が夫を奇としてたづねるなんてえのが世の所謂通のやる事さ、櫻を見て浮かれるやからには、出來ない奴よ。古人に老樗軒てえ墓通があッて、當時江戸にある諸名家墓處一覽てえ書物を著した事があッたッけが、根岸の相庭さんが七墓廻りてえのをやッたてえ事が新聞に出て居たッけ、知らねえかなァ、やまとや、みやこなんぞを讀で居ちや。

いや〳〵害しやすねえ、小新聞なんざァ、貧中時事に感ずる處あッて讀みやせんねえ。

ぢや何を取てる、さうさ讀賣かね。

ぢやがァせんねえ。

國民。

でもがァせんねえ。

何をとッてる。

何も取らない處に見識が有りやす、大抵はれ客に讀で貰ひやすねえ。

うッぷ、ろんな事だらうと思ッて居たから話せねえのさ、いつかの國民に藤阿彌てえ名前で出て、居たが、ありや不智庵さ、打田丘さ、見梅ずの記てえ題からして捻ッた記行があッたが、矢張先生等も此處へ來たのさ。

ぢや矢張同類でげすな。

だからさ、墓廻りなんてえもなア、ろも〳〵風流家のする事さ、俗物なら花見に出掛る處を、捻ッて墓見たア、思ひ附だらうぢやねえか。

なアる、夫から初まつたので、げすかねえ、はかみの見物てえ奴は。

よし〳〵先ざッと通りものになるてえと、花でもなんでも人の行かない時に行くのさ、夫で以ッて明星や櫻定めぬ山かづら、何てえ名吟を迂鳴のさ。

へえ猩々や酒を離さぬてえのでげすか。

しッ、仕様がねえなア、共に風流を語るに足らず。

情ねえなア。

だけれども若旦那あなたにやア、貧中大きに感じて居やすよ、何しろこれから一つ仙骨も宜うがすが、例の葷酒山門に入るを許して、勇氣をつけやうぢやがアせんか然り而してあとの段取に掛りやせう。」

まアさせく處にあらず、これからが樂みさ、橋場の總泉寺へ行うぢやねえか。

總泉寺、恐れ入たねえ。

來さッし〳〵、彼處は千葉家の菩提所で、隨分古い石碑があるよ、さう〳〵平賀源内風來山人の墓はたしか彼處にあッたッけ、平田篤胤先生のもあん中にあッたッけ、何しろ行う。

こりや驚いたねえ、れウや、おや、泣きやすよ。

泣くにや及ばねえよ、ぢや宜事があらア興福寺の裏手にそら乙な家があッたらう。

はッ、いつかお供しましたッけ、あれでげすか。

あれぢやねえのさも少しさきさ。

ありやす〳〵。

知てるかえ。

よかア知りやせんが、何でもそんな家がありやしたッけ。

あすこさ。

結搆。

なんとも云へないぢやねえか。

まァさ、早い處がお供するんでげせう、しゞみか何かでおまんまてえので。直てれさ。

だけれどもあなた嘘でッせ、あれッきりとァ。

困ッたねえ、いよ〳〵俗にゐやァがッた。

まァさ、どうせ貧中が附錄となッちや仙骨は許しやせんよ、れあきらめなせえまし。

仕樣がねえなァ、宜し〳〵ぢや仙骨主義はお廢しとして、それから大浮れに浮れやうかの、

その事々さうなくッちやならないのさ、ぢや何處にしやせう。

待ちねえよ、夫にしても軍用金だて、はてな此處いらではおッと有る、寺嶋村まで來さッせえ、久しぶりで一本許り御用を仰せつけてやらう。

其奴ァ妙ッ、さう物事が極ッた以上てえもなァ、因循しては行けません、其處でれ待ちなさいよ、寺島村ですねえ、寺島村てねと白髭の近邊だから、いッろ奥の植半にしやせうねえ、若旦那それが宜うがせう。

さうさ、夫も宜し、ま、何しろ來さッせえ、橋場を渡らう。

橋場結構さう來なくッちや橋場らねね、まァさ、だまッてらッしやいッたらッ、

ほい、斑犬かぶちな樣だがまァ聞かしやんせ。

仕樣がねえな、おい〳〵花唄でもねえぢやねえか、氣をつけさッせえ。

ほい、お巡りさんか、これは花唄恐れ入りやしたで、一つ落し話しが出來たぢ

やがァせんか。

宜よ、ちと斑犬ぢやねえ、手前の口を閉で居ねえな。

宜いしよ、ぢやこゝは世話たんまりで、さうさ島原の先達て八つ山下てえのた

ねね、寺島が例の提灯を打落すてえと、駕屋は驚いて上下へ逃げて這入る、あと

駕の中より左團次の焚出しの喜三郎が出て、てん中へ這入り、どゝ寺島が例の煙

草入れを落し花道へ行く、左團次これを拾つて成駒屋に突き當り、双方跡へ下つ

て急度なるを木の頭て、寺島は逸さんに向ふへ這入る、成駒は舛若を圍ひ、喜三

郎はふるへる、此引張宜しく涙の音、新内の組方にて幕と云ッた樣な形で行きや

せうかねえ若旦那。

仕様がねえなア、何しろ此處は舞臺一面の涙、布涙の音とん〳〵　向ふへ渡るさ。

れッと船頭さん呼んだのはたれでもねえ、わたしぢや〳〵。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

入りにける夕日もいとゞまばゆき眼元を、扇子と共にぱちり〳〵、なりはと云は結城紬に菊蒲草の書生羽織、何れ堅氣の人とは見えず、約束でもあるか、人待顔で退屈を酒に交せて飲んで居るは植半の奥二階、酌に出た女中を相手に幇間の賣中、金の代りにお世辭を振り蒔くも家業柄。

おッと澤山、とうして姉さんはてんなに愛嬌かあるんだらうねえ。

宜でざんすよ。

串盛ぢやねえ、何しろ此口もとが罪さ。

宜でざんすよ。

ちよいと〳〵宜ぢやねえか、おウや、おや。何しろ此奴ア驚いたねえ、とうしたんだらう眞逆嘘ぢやなからうなア、寺島村とア聞て居たが、肝心の番地と先き

の家名を聞て置んだッたッけ、はッてな、如何にも遲いねえ、それとも烟かしいつかも此樣な事があッたッけ、大雪の夜の二時過ぎ叩き起されて、雪見てねので、土手まで行ってまかれたてとかあッたッけが、今日も又あの形ぢやないかしら、何しろ心細いね、ちよいと〳〵姉さん。

お呼ひなさいましたか。

はゝかりさん、これをぐッとあつくして戴きたいねえ。

かしこまりました。

何しろ驚いたねえ、泣き度なるねえ、どうなすッたんだらう、いくら堀越か御最負でも正かこれで木なして幕でもなからうなア、たが何だか怪いねえ。

御師匠さんお使が、

はッ何でげすかこれを持て、何だらうかうや、おや、大變さ大變、夫れでもよく此處に居るのが知れたねえ、使は歸りやしたか。

はッ、直と歸りました。

驚いたねえ、何てえこッた。

何でございますか。

なアにねえ、飛た事が出來したのさ、此奴ア驚いたねえ、何しろかうして居る譯にも行ねえから、姉さん大急ぎで勘定して下さいな。

かしてまりました、れ歸りですか。

兎も角歸らなくッちや納まらねえ事か降て湧て來たのさ、其處でと、姉さんも し私が歸ッたあとへ、小山さんてえお客が見えたら、此手紙を御覽に入れて、さう云ふ譯ゆゑ泡を喰て歸ッたと、さう云ッて下さいな。

かしてまりました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

師匠待てたよ大變さ。

さうだてえのて、お坐敷で有たが驚いて歸ッて來たのさ病人は。

あすこに寢て居るが、多分六づかしからうてえので、心配して居るのさ

其奴ア驚たねえ、おい〳〵お種、さう布團を冠ッて居ちやア呼吸が籠ッて行けねえぢやねえか、おいおいお種、れウや、おや、お種ぢやなくッて、あなた若旦

那ぢやがアせんか。

さうさ、奥の景氣はどうであッたえ、

串戲ぢやありやせんせ、若旦那、どうも驚きやしたねえ、此樣な驚き方てえものア、貧中腑の緒きッて以來だねえ、何しろ御約束だから、あれから仰しやる通り、奥の植半でぐびり〳〵やッて居やす處へ家からてゐので、使で以ッて妻アが大病と電信が掛ッたから、驚きやしたねえ、夫ぢやてえので、直ぐ勘定して駈けつけて來やしたらてれさ、全くあなたの新作狂言たア氣が付かないぢやがアせんか、實に驚きやしたねえやれ〳〵。

おい〳〵さう氣を落すにも及ばねえ、己りやア又話しを落した計りさ、併し奥の勘定だ取ッて置な。」と若旦那より貧中の前へ天降らしたのは紫色のゑびす二枚。やれ嬉しやと、貧中夢中になッて引ッ攫んだのは揺卷の襟なりし、さては今のは夢でありしか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あけの鐘でんと撞きや鴉がきまりで、あほ〳〵と森を離れてなき渡りぬ。

あらづくし終

明治廿五年五月一日印刷
同　年五月七日出版

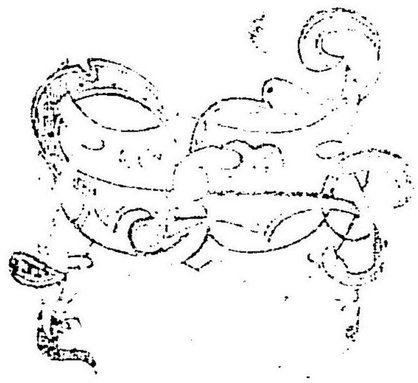
〔あらつくし〕
定價金拾五錢

發行者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍會社
代表者本郷區湯島町六番地　金港堂書籍會社副社長　三宅米吉

印刷者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　日置九郎

大賣捌所　大阪市東區南本町四丁目　金港堂
宮城縣仙臺市國分町五丁目　金港堂
東京市日本橋區吳服町　萬里　野口幾太郎

印刷所　東京市京橋區宗十郎町十五番地　國文社



特13
963

あらつくし

国立国会図書館

092820-000-5

特13-963

あらつくし

金港堂

M25

DBQ-0110